第二部

六、世界が知っていたこと

南京大虐殺について、世界は闇の中にいたわけではない。事件が展開するにつれ、大虐殺のニュースは絶え間なく世界中の人々に送り届けられた。南京陥落直前の数ヶ月間、首都南京には多数の外国特派員が住んでいて、日本軍の飛行機による空襲を報告していた。一二月初めに日本軍が運命の首都に接近すると、記者たちは戦闘、放火、最後の瞬間の撤退、そして国際安全区委員会の創設などの生々しい記事を毎日のように送りつづけた。驚くべきことだが、大虐殺が始まったばかりの頃、日本の新聞は、駆り集められて処刑されようとしている中国人たちや、河岸で処分される前の死体の山の写真、日本兵の間で行われている殺人競争、またはそれ以上にショッキングな記者自身による説明を掲載していた。

明らかに、国際世論の抗議を受ける前の数日間の虐殺行為は日本政府の強烈な誇りの源だった。南京陥落のニュースが伝わったときには、日本中の人々の間で祝勝会が催された。東京では南京そばの祝勝料理が振舞われ、夕方には日本中の子どもたちが提灯行列で行進し、日の昇る国の勝利を祝った。日本政府が慌てて自分の軍隊の所業を隠蔽し、ニュースをプロパガンダに変えるようになったのは後のことであり、パネー号の沈没のニュースと南京市民の虐殺行為が国際的に非難されてからだった。数人のア

メリカ人ジャーナリストの努力によって、日本は国家としての大きなスキャンダルに直面することになった。

アメリカのジャーナリスト

その時に西欧諸国の世論に決定的な影響力をもったのは、ニューヨーク・タイムズのフランク・ティルマン・ダーディン、シカゴ・デイリー・ニューズのアーチボルド・スティール、そしてAP通信のC・イェイツ・マクダニエルの三人のアメリカ人外国特派員だった。彼ら三人の足跡は、いずれも冒険の色彩を帯びたものである。ヒューストンから来た二九歳の記者だったダーディンはアメリカから中国までの旅費を無料にしてもらうために、貨物船で甲板をモップで拭きウィンチの掃除をしていた。上海に着くと、彼は日刊の英字新聞で仕事をし、やがて日中戦争を取材するためにニューヨーク・タイムズに移籍した。スティールはもっと年上の特派員で、日本軍による満州の占領と拡大するアジアの戦争を報告していた。多分、三人の中で最も向こう見ずだったのはマクダニエルだろう。大虐殺の前に、彼は郊外の戦線を自動車で駆け巡り、「戦争の現場を探している」ときに、爆発した砲弾で危うく命を落とすところだった。

ダーディン、スティール、そしてマクダニエルは大虐殺が始まった数日後には市を離れたが、南京にいた短い時間の中で巨大な衝撃を巻き起こした。彼らはアメリカ合衆国最大で、最も信頼されている新聞紙上に掲載される記事を書いただけでなく、多数の生命を救うために国際安全区委員会に参加した。

南京大虐殺は、新聞記者たちに中立的な観察者としての本来の役割を逸脱し、一個の参与者として戦

争のドラマに飛び込んでいくことを強いた。ときに、彼らは中国の民間人を日本の侵略者から護ろうとすることにより、自分自身の記事の主役になった。たとえば、C・イェイツ・マクダニエルはアメリカ大使館の中国人の召使を保護する役割を引き受けた。大虐殺の間、彼らの多くは非常に怯えていて、水を補給するときにさえ建物の外に出ることを拒んだ。そこで、マクダニエルは何時間もかけてバケツに井戸の水を汲み、それを大使館に運んで、召使たちに飲ませた。彼は行方知れずになった召使たちの親戚を探し（多くの場合、残っている死体を見つけ出した）、大使館に押し入ろうとする日本兵を追い出した。

記者たちは、明らかに、到底、助けることができない人々をも救おうとした。たとえそれが死ぬ間際の人たちを慰めるだけのことでしかないとしてもである。大虐殺のとき、ダーディンは歩道に横たわっている中国兵に出会った。彼のあごは弾丸で撃ち砕かれ、身体からは出血していた。兵士は手を差し出し、ダーディンはそれを掴んで握った。数年後に、彼は回想している。「私は彼をどこに連れて行ったらいいのか、どうすればいいのか分からなかった。そこで私は、愚かにも、あることをしようと決めた。私は五ドル紙幣を彼の手に握らせた。もちろん、それは彼にとって全く意味のないものだった。しかし、いずれにしても、どんなことであろうと、私は何かをしたいという衝動を感じていたのである。彼は辛うじて生きていた」。

一二月一五日に、ほとんどの記者たちは、彼らの記事を送るために、南京を去って上海に向かった。彼らの南京市最後の日は気味の悪いものだった。川岸に向かう途上で、記者たちの自動車は水門の下の文字通り数フィートにも重なる死体の上を通って進んだ。そのとき、すでに野犬が死体を貪り始めてい

た。その後、彼らが船の到着を待っているときに、日本軍が千人の中国人を並ばせ小集団に分けて跪かせ、一人ずつ後頭部を撃っているのを見た。処刑の間、一部の日本人は笑っていて、あるいは煙草を吸っていて、まるで豪華な見世物を大いに楽しんでいるかのようだった。

AP通信のマクダニエルは南京に一日長く滞在してから上海行きの駆逐艦に乗船した。一二月一六日、中国の破滅した首都における最後の日に、彼はもっと多くの死体を見、腕を縛られている中国人の長い列の横を通った。中国人の一人が集団から離れて、跪き、マクダニエルに死から救ってくれるよう懇願した。マクダニエルは書いた。「私には何もできなかった。私の南京最後の記憶。死んだ中国人、死んだ中国人、死んだ中国人」。

映像ジャーナリスト

南京の近くには、自らの生命を危険にさらしてパネー号の爆撃を撮影した、アメリカの二人の映画ジャーナリストがいた。爆撃のとき、ユニバーサル映画のノーマン・アレイとフォックス・ムービートーンのエリック・メイエルは、たまたま艦に乗っていたので、上質の記録フィルムを得ることができた。彼らは攻撃から無傷で生還することができたが（アレイは爆撃と機関銃の掃射から逃れるときに、指にかすり傷を負い帽子に穴をあけられただけだった）、別のジャーナリストは彼ほど運がよくなかった。砲弾の破片は、アレイに続いてパネー号の階段を駆け上がっていたイタリア人記者サンドロ・サンドリの眼を背後から直撃し、わずか数時間後に彼は死んだ。

生き残ったパネー号の乗員と共に、川岸の葦の茂みに隠れていたとき、アレイは自分のフィルムとメ

イエルのフィルムを麻の布で包み、泥の下に埋めた。彼は日本軍が自分らを殺しに岸まで来ると思ったのである。その後、フィルムは無事に回収され、アメリカ合衆国に輸送され、事件を撮影したニュース・フィルムは全国の映画館で上映された。

アメリカ合衆国では、パネー号の撃沈は南京で発生していた大規模な強姦と殺戮全体よりも大きな騒動を巻き起こした。一二月一三日にフランクリン・D・ルーズベルト大統領は、爆撃に「衝撃を受けた」と語り、天皇裕仁に即刻の賠償を要求した。数日後に、消耗しきった生存者たちがようやく文明社会にたどり着いたとき、大衆の反応はますます悪化した。汚れて寒さに震え、毛布と中国の掛け布団、ぼろぼろになった衣服を身にまとった生存者の中には、ショックで未だに死線をさまよっている人もいた。彼らの話は、彼らの写真とともに、この国のすべての主要紙に、「一時間も続いた日本軍の攻撃にさらされたパネー号の被害者」とか、「南京における屠殺と略奪の統治」というような見出しで掲載された。アレイとメイエルのフィルムが劇場で上映されると、アメリカの観衆の間にさらなる激怒と反日感情を喚起するばかりだった。

日本の損害対策

外国特派員が南京を去った瞬間に、日本人は市を封鎖して、他の記者が市内に入れないようにした。ジョージ・フィッチは、これが一二月一五日に始まったのを目撃している。その日、彼は外国特派員を自動車で川岸まで送り、彼らを上海行きの砲艦に乗船させた。フィッチが下関から南京に向かって自動車で戻るときに、城門で日本の歩哨が彼を停止させ、再入城を完全に拒絶した。上海から戻ってきて、

フィッチと同乗していた日本大使館員の岡村氏でさえも、その男を説得して通行を認めさせることができなかった。「日本では大使館は軍に対しては何の役にも立たない」。最後に岡村は軍司令部に向かう自動車の一台をつかまえて、フィッチに対する特別な通行証を得なければならなかった。

日本人がなんとか少数の外国人の市内への訪問を許可したとき、彼らは訪問者の動向を注意深く管理した。二月に、彼らは数人のアメリカ海軍士官が南京を訪れることを認めたが、日本大使館の自動車に乗り、日本大使館の担当者を同行させた上でだった。四月になると、日本の司令部の上層はほとんどの外国人に対して自由に市に入ることも市から出ることもできないようにした。

彼らの吐き気を催すような非道の詳細を隠蔽するために、日本人は外国の外交官が南京市に戻ることまでも妨害した。しかし、最終的には、彼らは真実を覆い隠すことはできないことが明らかになった。特に、ドイツ人とアメリカ人を欺くことはできなかった。

南京大虐殺における外国情報機関

ヒトラーの政府は日本がものごとを遅延させる動機をすぐに理解した。「私が前の報告書で述べた、大虐殺の公的な証拠を作成できないようにするために、日本人が我々の帰還を遅らせているのだという想定は、正しいということが確認されました」。一月にドイツの外交官がベルリンに報告している。「当地にいるドイツ人やアメリカ人によれば、外国の外交官が南京に戻るという意図が明らかになるや否や、民間人、女性、子どもに対する無分別な大量殺戮の証拠を除去するための大がかりな清掃作業が行われたということです」。

アメリカ政府もまた、日本が覆い隠そうとしているものを知っていた。日本の国外機関の上層部の外交通信は暗号によって保護されていたが、一九三六年までにアメリカ陸軍信号情報部の暗号解読班が日本の暗号法を解読した。その、アメリカ人の間での通称は〝RED〟だった。この結果、南京大虐殺の時期には、アメリカの情報機関は東京の日本の指導者たちとワシントンDCの外交官たちとの秘密の交信を傍受して読むことができた。一九三七年一二月二六日に、外務大臣廣田弘毅がワシントンの駐米大使斎藤博にある通信を送った。そこでは、アメリカ大使館のスタッフの動きを妨害して、彼らの早急な南京への帰還を阻止する必要があると強調されていた。通信はこのように読み取れる。「彼らが戻って、彼らの国籍をもつ人たちから軍部の行為に対する好ましからざる報告を受け取り、そのような苦情を受けた外交官がその報告を彼らの母国に転送すれば、我々は極度に不利な位置に置かれることになるだろう。したがって、最大限、我々が取るべき最善の方策は、可能な限り彼らをここに留めておくことであると我々は信じている。それには多少の抵抗を感じるかもしれないが、この問題における破局の危険を冒すことよりは好ましいと信ずる」。

しかし、アメリカ政府はその時点で彼らが知っていたことを公表せず、結果的に日本が真実を隠蔽するために行っていた検閲に貢献することになった。たとえば、ユニバーサル映画のニュース映画製作者ノーマン・アレイは日本軍のパネー号攻撃を記録した五、三〇〇フィートの映画を撮影したが、映画を劇場で公開する前に、ルーズベルト大統領は三〇フィートほどのフィルムをカットするよう依頼した。その部分は、甲板すれすれに砲艦を爆撃し銃撃している日本軍の攻撃の場面だった。この三〇フィートは恐らくフィルム全体の中での最高の映像で、日本政府を最も強く糾弾している部分だったのだが、アレ

イは申し出に同意した。*The Panay Incident*（パネー号事件）の著者ハミルトン・ダーバイ・ペリーによれば、ルーズベルトは、攻撃が対象の確認を誤った結果によるもので意図的に行われたものではないという日本人の弁解を、信憑性のあるものにしたかったのだという。疑いもなく合衆国政府は、この爆撃について、日本との間での金銭的な補償と外交的な話合いによる和解に至ることを強く望んでいて、この三〇フィートはそのような和解を不可能にするだろうことを知っていたのである。

日本のプロパガンダ

日本人が公衆の意見に影響力を及ぼそうとする試みは、そのときに始まったものではなかった。南京大虐殺以前にも、アメリカの情報機関の人々は、有利な宣伝をアメリカで広めようとする、日本の「極秘」の計画を見ていた。また、日本政府は大きな予算を割いて、有力な新聞関係者に接触し、主要な新聞とラジオ局に広告を出し、パンフレットやチラシの宣伝文書を印刷していた。

しかし南京大虐殺で日本が直面した広報活動の破綻はとてつもなく巨大なもので、それでも彼らが事実を隠蔽しようとしたことは、今から見れば、ほとんど馬鹿げていたように思える。南京にいる自らの軍隊に規律を強制する方策を適用する代わりに、日本人は力を合わせ、彼らの使用できる手段を総動員して、プロパガンダの電撃作戦を発動した。それによって彼らは、世界史上最大の流血の惨事の一つについての詳細を、幾分でもぼかすことができないかと望んだのである。

日本のメディアは、まず、南京市ではすべてが良好であると主張した。一二月二〇日にロバート・ウィルソンは、日本の同盟通信社が、南京の人々は家に戻りつつあり、すべてが正常になったと報告してい

るのを聞いた。「それが南京から発せられるニュースのすべてならば、それは本当のニュースが露見したときの大きな破綻を準備するためのものだ」。ウィルソンは書いた。

次に、日本政府は注意深く準備した観光旅行を日本人の訪問者に許可した。一週間後に同盟通信は、日本人の観光客で混み合っている日本の商船が、上海から南京に到着したと伝えた。この訪問についてジョージ・フィッチは書いている。「注意深く、彼らは、現在では死体が片付けられている僅かな通りを案内されていった。彼らは優しそうに中国の子どもたちに菓子を渡し、恐怖で縮み上がっている子どもたちの頭をなでた」。フィッチは観察していた。日本の企業関係者の市の旅行団体は多数の婦人たちを伴っていて、彼らは「自分自身で大いに満足していて、また日本の素晴らしい勝利を喜んでいるようだった。しかし、もちろん、彼らは真実を聞いていない。世界もそれを聞いていないのだろうと私は思う」。

一月には、日本の報道関係者が南京に来て、日本国内と世界中に配信するために、市内の写真を撮影した。その年の大晦日に、日本大使館は難民キャンプの中国人管理者を会合に呼び出し、翌日に市内で「自発的な」祝賀会を開催すると語った。中国人は数千の日本の国旗を製作し、日本兵を歓迎する南京住民の群集の様子を映画に撮影するために、旗を手にして行進するよう命令された。日本の写真家も南京に来て、日本の軍医の医療サービスを受け、日本兵に飴をもらう中国の子どもたちの写真を撮影した。「しかし、カメラが去ったときには、このような行為は繰り返されなかった」。ルイス・スマイスは友人への手紙で書いた。

日本のプロパガンダの最もいやらしい例は、上海で発行されていた日本支配下の新聞「新申報」に掲

載された一九三八年一月八日の記事である。「南京市の和気藹々の雰囲気の中で喜びが広がる」という見出しの下で、記事は「皇軍が入城すると、銃剣を鞘に収め、診察と治癒のために、その慈悲に満ちた手を差し伸べ」、南京の飢えて病んだ大衆に医療と食物を与えたと主張した。

皇軍への挨拶として老若男女がみな跪き、彼らの尊敬の念を表現した。……日章旗と赤十字の旗の下、兵士たちの周りに集まった多数の群集は、彼らの感謝の念を表すために「万歳」と叫んだ。……兵士たちと中国の子どもたちは幸福そうに一緒になって、楽しく滑り台で遊んだ。いまや南京はすべての国が注目する最高の場所になった。ここでは、人は平和な住居と幸福な仕事の空気を吸うことができるのである。

見え透いた三文芝居で大虐殺を言い逃れようとする日本の試みは、残っていた宣教師たちを刺激し、その反応は日記の中での疑念に満ちた記述となった。ここに、いくつかの例がある。

ジェイムズ・マッカラムの一九三八年一月九日の日記から

日本人たちは安全区における我々の努力を貶めようとしている。彼らは憐れな中国人を威嚇し、脅迫して、我々が言ってきたことを拒絶させようとしている……一部の中国人は、略奪、強姦、そして放火を行ったのは日本人ではなくて中国人なのだということを証明する準備までしている。ときどき私は、狂人や白痴を相手にしてきたのではないかと感じる。そして、私たち外国人

すべてがこの試練を通して生き残ってきたことに驚嘆する。

ジョージ・フィッチの一九三八年一月一一日の日記から

……上海で発行されている日本の新聞のいくつかを目にした。その中の二つは東京日日新聞だ。これらの新聞には、一二月二八日という早い時期に、商店が開かれ、業務は正常に戻り、日本人は我々と協力し合って気の毒な難民に食料を与え、市からは中国人の略奪者が一掃され、今では平和と秩序が行き渡っているとある！　よろしい。事態がこれほど悲惨でなければ、笑いたくなるような話だ。これは、戦争がはじまって以来、日本人が世界中に送ってきた嘘の典型だ。

リーダーズ・ダイジェストに掲載されたジョージ・フィッチの日記から

三月に、東京の国営ラジオ局がこの記事を世界中に発信した。「南京における多数の死と財産の破壊の責を負うべき不良集団が捕らえられ、処刑された。彼らは蔣介石の旅団の不平分子であったことが判明した。現在では、すべてが平穏で、日本軍は三〇万人の難民に食料を供給している」。

ルイス・スマイスと彼の妻が一九三八年三月八日に書いた手紙から

日本の新聞の最新記事によると、一一人の中国人の武装強盗団にすべての責任があったことが分かったという！　ほう、彼ら全員が何週間もの間、毎日、夜も昼も、百人から二百人ずつを強姦し、報告されている五万ドルを持ち去ったとするのならば、彼らはとてつもなく強力な中国人

だったわけだ……。

チラシは日本人のプロパガンダのもう一つの手段だった。大量処刑の間にも、日本軍は飛行機で空からチラシを投下して、南京の人々を宣伝情報漬けにしていた。たとえば、「家に戻った良い中国人は、食物と衣料を与えられる。日本は蒋介石の兵士の怪物にだまされない中国人の良い隣人になりたいと欲している」といった具合である。チラシには彩色した絵が描かれ、端麗な日本兵が中国人の子どもを腕に抱き（ある人は「キリストみたいだ」と評した）、中国人の母親が彼の足下で身を伏せて、一袋の米への感謝を示していた。ジョージ・フィッチによれば、チラシが投下された日には、何千もの中国人が難民キャンプを去り、破壊された家に戻ったという。

日本人はまた、悲劇が起こった家の付近に、鮮やかな極彩色のポスターを貼った。その一枚は、日本兵が小さな子どもを抱きかかえ、母親に一缶の米を与え、父親には砂糖やその他の食料を与えている図が描いてあった。ドイツ人の外交官の報告書はそのポスターについて描写している。「魅力的で、愛すべき兵士が手に調理用具を持ち、肩には中国の子どもを乗せ、貧しいが正直な中国の農民に両親は溢れんばかりの感謝の気持ちを込めて彼（兵士）を見つめている。家族は善良なおじさんと並んでいて幸せである」。絵の右上には説明書きがあった。「家に帰りなさい！　我々は米を与える！　日本軍を信頼しなさい。そうすれば救われます！」

同時に、日本人は大虐殺から注意をそらすために、盛大な歓迎会や広報式典を主催した。二月初めに、日本の将官が外国の外交官を南京の日本大使館での茶会に招待した。彼は、日本軍はその厳しい規律に

よって世界的に有名で、日露戦争や満州事変ではただ一度の規律違反も発生しなかったと自画自賛した。将官は言った。何らかの理由で日本軍が南京で非道を働いたとすれば、中国の人々が外国籍の人間に煽動されて抵抗したからだ。外国籍の人間とはもちろん安全区委員会を意味している。しかし、非常に奇妙なことに、同じ演説の中で前の言葉と矛盾して、将官は日本兵が南京への進軍のときに、食べられるものや使えるものを何も見つけられなかったので、その怒りのはけ口を人々に向けたということを認めた。

しかし、日本のメディア宣伝チームは、南京中を吹き荒れた放火、強姦、そして殺人について、外国の外交官社会を欺くことはできなかった。二月中旬に、日本人は上海で芸者や報道写真家も用意された軍楽隊の演奏会を開催した。しかし、ドイツの外交官は見ていた。お祭りの式典がもたれているときに、「一一歳の少女の母親は強姦しようとする兵士に少女を渡せと迫られ、それを拒否すると家を焼き払われた」。

安全区の指導者の反撃

国際安全区委員会は、プロパガンダの波状攻撃と戦うためにできることをすべて実施した。大虐殺の最初の数日間には、安全区の指導者は、フランク・ティルマン・ダーディン、アーチボルド・スティール、そしてC・イェイツ・マクダニエルのようなアメリカの外国特派員の援助を受けることができた。しかし彼らが去った後、国際委員会はすべてを自分の力で行わなければならなくなった。日本政府はシカゴ・トリビューンのマックス・コッペニングなどの他の記者が南京に入ることを禁止し、その結果、

日本兵の行状は、世界のメディアが彼らの行動を見ていないことを知って、さらに悪くなった。

だが、日本の政府は国際委員会のメンバーが自力で宣伝活動を展開する能力を過小評価していた。安全区の指導者に共通する一つの顕著な特徴は、言葉を駆使する技芸における高度な訓練を受けていたことである。ほとんど例外なく、彼らは雄弁な書き手であり話し手であった。宣教師たちは、アメリカやヨーロッパの最高の大学で教育を受け、成人してからは、ほとんどの月日を、説教を話し、文章を書き、キリスト教の講義をするという行為を献身的に行って過ごしてきた。委員会の教授には、本を書いた人もいた。それ以上に、彼らはグループとしてメディアで働くことに洗練されていた。南京が陥落する遙か前から、彼らは南京のラジオ放送での講話を楽しんでいたし、人気のある出版物に中国に関する記事を書いていた。もうひとつ、宣教師たちは、日本人が考えもしなかった点で先んじていた。彼らは、全生涯をかけて地獄の真の意味を熟考していた。南京でそれを見つけたとき、彼らは一瞬も無駄にせずにそれを世界の公衆に向けて描き出した。その厳しく力強い文章は、彼らが目撃した恐怖を読者の心に呼び起こした。

完全な無秩序状態が一〇日間も続いている。恐ろしい情景の前で耐えていなければならないこと……まさに地上の地獄だ。最も貧しい人々の最後の持ち物まで奪い尽くされる。貧者の最後の硬貨、最後の粗末な寝具（凍てつくような気候の中でだ）、貧しい車夫は人力車を奪われる。それを目にしながら、ただ立っていなければならないのだ。避難所を求めて来た何千人もの武装解除した兵士たちと、何百人もの無関係な民間人が連れ出され、目の前で射殺され、あるいは銃剣の

練習台にされる。その、彼らを殺害する銃声を聞かなければならない。何千人もの女性たちが目の前で跪き、狂ったように泣き叫び、彼女らを餌食にしようと狙っている畜生どもから救ってくれるよう懇願している。国旗が引き摺り下ろされ侮辱される、一回ではなく一〇回以上も。その前で何もできずに耐えていなければならない。そして、家庭が略奪され、愛してきた都市と自分の最高のものを捧げようとしてきた協会の建物が、組織的な放火によって燃え落ちていくのを凝視している。これは、私が今まで目にしたことのない地獄だ。

（ジョージ・フィッチ、一九三七年一二月二四日）

語ろうとするだけで恐ろしくなる話だ。どこで始まったのかも、どこで終わるのかも分からない。このような残忍性は聞いたことも読んだこともない。強姦、強姦！　少なくとも夜に千件、そして昼にも多く発生していると思われる。抵抗した場合、あるいは少しでも拒否の姿勢が感じられた場合には、銃剣の一撃と銃弾である。一日に何百もの事件を書き並べることができる。人々は狂乱状態になっている。我々外国人に出会うや、跪き、「叩頭」して、救いを請う。兵士と疑われたものは、いや、そうでないものでも、市の外に連れ出され、百人単位で、いや千人単位で射ち殺される。ある難民センターでは、最も貧しい難民までもが繰り返し、繰り返し、強奪され、最後の一銭も、ほとんど最後の衣料や寝具をも失っている……朝も昼も夕も、毎日、女たちが誘拐されていく。

（ジョン・マッカラム、一九三七年一二月一九日）

これらの恐ろしい事件については、いやというほど話してきたと思う。何十万もの事件がある。あまりの数に、心が鈍感になって驚くこともなくなりそうだ。このような残忍な人間が現代の世界にいるとは想像もしていなかった……切り裂きジャックのようなわずかな狂った人間だけがこんなことをすると思っていた。

（ジョン・ギレスピー・マギー、一九三八年一月二八日）

日本人の乱行の生々しい描写は、安全区では、日記だけでなく、手紙や回覧記事にも書かれ、謄写版印刷され、あるいはタイプライターで何度も何度も打ち直されたので、友人、親戚、政府職員、さらに新聞社はみなそれを受け取ることができた。虐殺を描写する記事を発信するとき、安全区の指導者たちは、委員会の個々のメンバーが報復を受けたり追放されたりすることを危惧して、しばしば受取人に、文献を公開する場合には作者を明らかにしないよう頼んだ。「この手紙が公開された場合、我々が南京から追い出される可能性があるので、くれぐれもその取り扱いは慎重に行ってください。そんなことになれば、南京の中国人には恐ろしい結果が待っているのです」。マギーは家族に書いている。彼は説明した。日本人は「大いに喜んで」外国人が去っていくことを許すが、誰にも戻ってくることを許さない。

安全区の指導者たちの忍耐、骨身を削る勤労、そして注意深さは、最後には報われた。最初にジョージ・フィッチの日記が南京の外に持ち出され、上海で「センセーション」を巻き起こした。彼の文章は他の人のそれとともに（多くの場合、重要な名前は伏せられていた）、素早く「タイム」、「リーダーズ・ダイジェスト」、あるいは「ファー・イースタン」などの雑誌に印刷されて行き渡り、アメリカ人の読者の憤激を喚起した。一部は、「マンチェスター・ガーディアン」紙のハロルド・ジョン・ティンパリー記

者の *Japanese Terror in China* (1938)（中国における日本の暴虐）や徐淑希の *Document of the Nanking Safety Zone* (1939)（南京安全区の記録）などの書物の中に再登場した。

ときに安全区の指導者は、読者の気持ちを緊張させるために、彼らの文献に警告の前文を書いた。「私が語ろうとしているものは、楽しい話ではありません。事実、これは非常に不快な話なので、気の弱い方には読むことをお勧めできません」。フィッチは出版される日記の前に書いた。「これはほとんど信じがたい犯罪と恐怖の話です。これは信じられないほど残忍な、堕落した犯罪者集団の、平和で優しく、遵法的な人々に対する破壊行為の物語です。……私は、近代史の中にこれに匹敵するものはないと信じます」。

彼らが予想した通り、安全区の指導者の報告は多くのアメリカ人の懐疑を掻き立てた。「リーダーズ・ダイジェスト」に The Sack of Nanking（南京の略奪）という記事が掲載されたとき、一人の購読者が書いた。「見え透いたひどいプロパガンダ、前の戦争で人々に語られていた古い材料が詰まった極度の懐古趣味。このようなものを信じる人がいるとは到底考えられない」。他の購読者からも同じような感想が寄せられた。しかし、「リーダーズ・ダイジェスト」の編集者は、これらの話は真実であると主張した。それらの信憑性を確保するために、編集者は「相当の骨折り」をして、安全区の指導者からの手紙をさらに収集して、一九三八年の一〇月号に掲載した。編集者は追記した。「我々が入手している資料は、この雑誌全体を埋め尽くすだけの量があり、すべてがここに掲載する典型的な抜粋の部分と符合している」。

幸運なことに、南京での犯罪行為は文章だけではなく、映画フィルムでも記録されていたので、否定することはほとんど不可能になった。家庭用の映画カメラをもっていたジョン・マギーは、南京大学病

院で寝たきりになっている何人かの被害者たちを撮影した。それは、日本人に生きたまま焼かれて、恐ろしいほどに焦げて変形した男たち、頭部に激しい銃剣の刺し傷を追ったホーロー器具店の店員（入院後六日経った後でも、脳の脈動を鮮明に見ることができた）、日本兵に輪姦され、首を斬り落されかけた被害者などの、忘れられないような映像だった。

結局、ジョージ・フィッチは自らの命を危険にさらしてフィルムを中国の外に持ち出した。一月一九日に、南京を離れる許可を得た彼は、日本の軍用列車の「想像もできないほど、兵士が混み合った、不快な」三等座席に座って上海に向かった。彼の駱駝毛のコートの裏地には、南京大虐殺を撮影した八巻の一六ミリフィルムが縫い付けてあった。後に彼が家族に語っているように、彼は検査されてそれが見つかったら即座に殺されるだろうと覚悟していた。しかし、幸運にもフィッチはそれを上海まで運ぶことができ、ネガをコダックの事務所に持ち込んで現像し、四組の映画を作製した。その一つは、南京を去ってドイツに帰る前のナチ党指導者ジョン・ラーベに渡された。残りはアメリカ合衆国にたどり着き、フィッチや他の宣教師が宗教的な集会や政治的な集会で講義をするときに上映された。フィルムのいくつかのコマは印刷されて雑誌「ライフ」のページに掲載された。後に、映像の一部分は、フランク・キャプラのドキュメンタリー映画「なぜ我々は戦うのか―中国の戦い（Why We Fight: Battle of Chine）」に挿入された。さらに、数十年後の一九九〇年代に公開された二つの歴史ドキュメント映画Magee's Testament（マギーの証言）とIn the Name of the Emperor（天皇の名において）でも、この映像が使用されている。

日本の残虐行為の文章による記事のほかに、写真や映画フィルムまでが世界中のメディアに行き渡ったときの日本軍の憤懣がどれほどのものだったのかは、想像するしかない。ほとんどの安全区指導者た

ちは継続的な恐怖感を感じながら生活していた。もしことが発覚せずにやりおおせるのならば、日本人は全員を殺すだろうと信じていた。ある人は自分の家にバリケードを築き、暗くなってからは、二人か三人で組を作らない限り外には出なかった。少なくともジョージ・フィッチは、自分の首に賞金がかけられているのではないかと疑っていた。しかし、彼らは不安を押して、夜間に安全区の重要地域の警備を継続し、日本の残虐行為を公表し続けた。一九三八年一月二八日に、ジョン・マギーは書いている。

「我々は日本軍の所業を世界に知らせるので、彼らは我々を敵以上に憎んでいる。我々はみな、誰も殺されていないことに驚いているし、今後も我々が安全でいられるかどうかは、まだ分からない」。

七、占領下の南京

最悪の事件は初めの六週間から八週間に集中して発生したとはいえ、南京大虐殺は数ヶ月間も続いた。一九三八年の春になって、ようやく南京の人々は、虐殺行為が終息し、占領されている間は必ずしも全員が殺されることはないのだということを知った。南京が日本の支配に屈従させられたとき、軍は住民全員を服従させる制度を施行し始めた。

当初は、服従させるべき実体があまり存在していなかった。ある外国人が書いた。「市の無秩序は想像することもできないほどのものです。汚物やあらゆる種類の廃物がいたるところに投棄されています」。ごみや人間の肉が通りで腐っていた。日本人は彼らの許可がなければ何もさせなかったのである。廃棄物や死体を処理することもできなかった。実際に、何日もの間、水門の下に何フィートも積み重なっている死体の上を軍用トラックが通り、人々に日本に抵抗することがいかに恐ろしい結果になるかを印象づけるように、死体を踏み砕いていた。

日本のためにこうむった公共財の損害の合計は、一九三九年の米ドルで約八億三、六〇〇万ドル、私的財産の損失は少なくとも一億三、六〇〇万ドルになるという見積もり値がある。この数値には、日本軍が

持ち去った再生産不能な文化財の損失の価値が含まれていない。

社会学者ルイス・スマイスの指揮の下、国際安全区委員会は南京地域の損害の系統的な調査を実施した。市内は五〇軒に一軒の住居に、郊外は三分の一の各村の一〇軒に一軒の家庭に調査員が派遣された。一九三八年の六月に、六〇ページの報告書が公表され、スマイスは、南京が受けた一二〇回の空爆と四日間の攻城戦による損害は、日本軍が南京に入城した後に加えられた損害の一パーセントにしかならないという結論を出した。

ほとんどの破壊は放火によるものだった。南京市の火事は市の陥落とともに始まり、六週間以上も燃えつづけた。兵士たちは士官の指導にしたがって建物に火をつけ、発火させるために特殊な化学溶液を染み込ませた布片を使用することもあった。彼らは、教会を、大使館を、大型店舗を、商店を、大邸宅を、小屋を焼き払った。安全区内も例外ではなかった。安全区のポンプや消化設備は日本人によって盗まれていたので、安全区の指導者は火事を消すことができなかった。南京大虐殺の最初の数週間で、軍は市全体の三分の一と全商店の四分の三を灰にした。

彼らはロシアの公使館を焼却し、アメリカ大使館を侮辱し、ほとんどすべての外国人の家を略奪した。明白に旗や紋章が掲示されていても無視された。日本人は特にアメリカの所有物には特別な侮辱を用意しているかのようだった。彼らは南京大学からアメリカ国旗を六回も引き摺り下ろし、泥の上で踏みつけ、再びそれを掲げようとするものは殺すと威嚇した。また、ナチと日本政府の間の同盟関係があったのにもかかわらず、ドイツの所有物もほとんどアメリカの所有物とほとんど同じくらいのひどさで被害を受けた。日本人はナチの旗を引き裂き、ドイツ人の家や企業を焼き払い、ヒトラーとヒンデンブルク

の肖像画を盗んだ。「これは、日本人が天皇の肖像画を崇拝することを考慮すると顕著な行為だといえる」。あるドイツ人は書いた。

南京の略奪は城内に止まるどころか、城壁を遙かに越える地域に広がっていた。日本兵は南京の周辺地区を荒廃させた。藁小屋に火を放ち、家具、器具、農具を煉瓦の小屋に集めて一度に火を放って灰燼に帰し、村全体を焼き払った。市の周辺地区の農家からは、家庭用のものも、そうでないものもすべての家畜がきれいに奪い去られた。

また、日本人はアセチレンガスの切断器具を使用し、拳銃を発射し、あるいは手榴弾を使用して銀行の金庫室をこじ開けた。そこにはドイツ政府や民間人の個人用の貸し金庫も保管されていた。兵士たちは彼らの獲物の一部を日本に郵送することを許されていたが、ほとんどの財は没収され、公用として集積された。倉庫は、翡翠(ひすい)類、磁器工芸品、敷物や絵画、金銀の財宝で、あっという間に満杯になった。一軒の保管庫に二〇〇を超えるピアノが集められた。一二月末に日本人は、宝石、芸術品、家具、貴金属、骨董品などの盗んだ品物を日本に輸送するために、波止場に積み上げ始めた。

日本の略奪者たちは、通常は高額な品物を探していた。彼らは外国の自動車を狙うので、安全区委員会のメンバーは、外国人が座っていないものはすべて軍が持ち去ってしまうと信じるようになった（死体を片付けるために使用するトラックも盗まれた）。ところが、日本兵は、南京大学病院に侵入して、ペンや懐中電灯や看護婦の腕時計などの小物も盗み、安全区に何度も何度も押し入って、行くあてのない人々から寝具や鍋釜や食物を盗んだ。ドイツ人の報告書は、一二月一五日に日本人が五千人の難民を整列させ、彼らから合計で一八〇ドルを盗むことができたと記している。ジョージ・フィッチは書いた。

「彼らから、一握りの汚れた米までもが兵士によって強奪された。ちょっとした不満を口にしようものならば確実に死のしっぺ返しがくる」。

一九三八年の一月には、軍用の店舗と国際安全区の米販売店を除けば、公式に開店している店舗は一軒もなかった。事実上、港に入っている船はなかった。日本人が地域の電力工場から約五〇人の従業員を連行して処刑したために、市のほぼ全域で、電気、電話、水道のサービスが利用できなくなっていた（生活用水の不足のために入浴は困難になっていたが、女性たちは洗っていない身体が日本兵の強姦の意思を挫くことを望んで、入浴しないままでいようとしていた）。

市はゆっくりと生活の場に戻っていった。南京の至る所で、家々に侵入して物を持ち去っていく人々が見られた。ある人は床板や木の羽目板を剥がして薪にし、ある人は金属や煉瓦を運び去って自分の家の修繕に使い、あるいは街路でほかの人々に売った。安全区の上海路には、ドアや窓までも含む、およそ想像できるあらゆる種類の略奪品を並べている何百もの行商人たちの前に、黒山の人だかりができていた。この活動は地方の経済を蘇らせ、飛躍させた。戦利品の商人たちの横には、新しい茶館や食堂が雨後の筍のようにならんでいた。

一九三八年の一月一日に日本人は、南京自治委員会という、市の新しい政府を発足させた。これを市内の西欧人の一部は「自治政府」と呼んだ。自治委員会の構成員は傀儡の中国人職員で、彼らは市の監督、厚生、財政、警察、通商、および交通を管轄した。春になる頃に、南京は外面的には、正常な都市機能を回復しつつあるように見えた。水道、電灯、および日々の郵便サービスは再開した。日本の市内

バスが運行され、人力車が通りに現われ、人々は南京から上海まで列車で移動することができるようになった。南京は急速に日本のための慌しい出荷センターになっていった。小型の機関車や、馬、野戦砲、トラックやその他の物資が、毎日、市内から近郊の浦口に向けて輸送されていった。

しかし、残忍な占領政策の兆候は至る所に現われていた。中国の商人は新しい公務員の給与を確保するための重税と法外な賃料を負担させられた。日本人は中国人の消費者向けの軍人の商店を開業し、それを通じて中国人の金や貨幣を吸い上げて、価値のない軍票と交換した。中国人の傀儡政府は市内に残っている貴重品や在庫品を、所有者の有無を無視して没収し、貧困を加速させた。中国人の下級公務員の間では、この状態を皮肉って「我々は今、認可された略奪を行っている」という冗談が語られていた。

重税による民衆からの搾取や押収よりも遙かに驚くべきものは、市内に再登場した阿片だった。日本の占領の前には、阿片は地下の麻薬で、高官や商人は南京の秘密の場所でこっそり吸っていたが、通りで公然と、厚かましく売られることはなかったし、それが青年たちの目に触れるようなこともなかった。市の陥落後は、人々は警察の干渉を受けずに堂々と阿片窟に出入りすることができた。これらの阿片窟では、麻薬を「官土」という阿片を指す用語を使って広告していた。阿片中毒を促進させ、人々をさらに奴隷化するために、南京の日本人は日常的に労働や売春の対価を麻薬で支払った。一〇歳の子どもにヘロインのタバコが売られた。南京大学歴史学教授のマイナー・シール・ベイツは、自分の調査に基づいて、南京地区の約五万人の人々がヘロインを使用しているという結論を出した。これは当時の南京地区の人口の八分の一になる。

踏みにじられた市民の多くは、麻薬の餌食になった。麻薬は、たとえ一時的でしかないとしても、彼

らの生活の悲惨さから逃避させてくれたのである。あるものは、大量の阿片を一度に飲み込んで、自殺を図った。あるものは麻薬を手に入れようと犯罪に走り、その結果、南京市内を強盗の波が襲った。南京市内の強盗発生を醸成させた後で、日本人は犯罪の横行を口実にして占領を正当化し、皇国の法と秩序が必要なのだとお説教した。

日本人の雇用主は、地域の多くの中国人労働者を奴隷以下に扱い、しばしば、些細な規則違反を咎めて彼らを殺した。後に生存者は証言している。中国人の雇い人に不断の恐怖心を植え付けるために、苛酷な環境と気まぐれな懲罰が故意に職場に課せられていたと。日本人が強奪した工場で働いていた一人の中国人は、彼がそこで目撃した数ヶ月間の恐怖を物語っている。同僚の雇い人が日本の監督者にセーターを盗んだと誤って告発されたとき、彼は足の先から喉までミイラのように縄で縛られ、煉瓦の塊で石打ち刑にされて死んだという。石打が終わったときには、身体はほとんど原型をとどめておらず、縄で固められた肉と骨は放り投げられて犬の餌にされた。あるとき、日本人は工場から小さな肩当ての束がなくなっているのに気づき、それがトイレット・ペーパーとして使用されているのを突き止めた。その日に便所を使用したことを認めた二四歳の女性が工場の裏に引き摺り出され、ナイフで首を斬りおとされた。ちょうどその日の午後には、日本の同じ殺人者が、スリッパを盗んだという嫌疑をかけられた一〇代の少年を殺した。

日本人は、南京の人々を使って医学実験まで行った。一九三九年四月に、彼らは市内に人間をモルモットにする研究施設を開設した。人体実験される人を彼らは「材木」あるいは「丸太」と呼んだ。日本人は、揚子江から歩いてすぐの中山東路にある六階建ての中国の病院を防疫研究所に転用し、栄一六四四

部隊と名づけた。研究所の置かれた場所は、軍用空港、花町、映画館、さらに日本領事館、憲兵隊事務所、あるいは中支那派遣軍上層部の本部といった有力な日本の中枢機関の集中する地区の近くだったが、厳重に秘密は守られた。構内の周囲は高い煉瓦塀で囲まれ、塀の上には鉄条網が張られた。施設内は衛兵が巡回していた。職員は、日本に送る手紙に栄一六四四部隊のことをけっして書いてはいけないと命令された。内部では科学者が中国人の捕虜にさまざまな毒物、細菌、致死ガスを注射し、あるいは食べさせていた。実験対象だった物質には、アセトン、砒酸塩、シアン化物、亜硝酸塩青酸塩、そしてコブラ、ハブ、アマガサヘビなどの蛇の毒液などがあった。日本人の科学者は、このようにして毎週一〇人以上の人を殺し、死体を栄一六四四部隊の焼却炉で処理していた。

一九四五年の八月に日本が降伏したとき、栄一六四四部隊の関係者は彼らの施設と資料を破壊し、研究所を爆破し、中国軍が南京に到着するよりも前に逃亡した。この秘密の研究所について知ることができたのは、戦後にこの部隊の科学者の一部がアメリカの尋問者に告白したからである。

身体を害する残虐行為、医学実験、そして麻薬の誘惑から逃れることができた幸運な中国人たちは、軍の脅迫の下の窒息しそうな市内の雰囲気の中で暮らしていた。日本の当局は、人々をピラミッド型の階層に組織することによって、大衆を支配する方法を案出した。一〇軒ごとの家が組を作り、一人の責任者を指名することを命令され、この責任者は一〇人ごとに組を作り、その責任者を指名することを命令され、これがずっと上まで続く。この制度の下で、南京のすべての人は自分の属する一〇人の組の責任者が署名した登録証を携帯することを要求された。このようにして、百人、千人の人間が新しい政府に対する忠誠を誓わされた。また、すべての人が自分の家によそ者や未登録の人がいることを直接の一

○軒の組の責任者に報告するよう要求された。その責任者はその上の責任者に報告し、こうしてニュースは市政府の地区の職員の耳に達することになる。これは日本人の発明ではなく、「保甲」と呼ばれる中国の伝統的な制度を、南京の住民に対する彼らの支配を合法化するために復活させたものである。

日本人はこの保甲制度が行き渡っているかどうかを頻繁に検査した。ときには、登録証を持たない人間を放ち、彼らが市内に落ち着ける場所を見つけられるかどうかを見た。二時間以内に、その人間が捕まらず、報告もされない場合には、その人間が滞在している地域の組の責任者が厳しく罰せられた。国際委員会のアルバート・スチュワードは一九三九年の日記に書いた。「これは、新しい体制への忠誠心を保持させるための日本流の方法だと思われる」。

戦争、放火、そして大虐殺を受けたのにもかかわらず、南京は復興した。壊滅的な飢饉は発生しなかった。それは、日本人が最終的に食料の搬入を認めたからだけではなく、内陸の中国軍を追ってほとんどの日本軍が南京を去った後に、地方の農夫が冬小麦を収穫することができたからだった。一年の間に、肥沃な揚子江デルタの農業の多くは、戦前の水準に近い収穫量を生産した。これは、日本占領下の南京で食糧不足がなかったということではない。城内の菜園や農園は、日本兵によって野菜を没収されただけでなく、農業の収穫を根こそぎ日本の使用に転換することを強いられたために、回復できなかった。また、戦争が長引くと、日本の当局は物資に対する統制を引き締め、石炭や米などの必需品の厳しい配給制を実施した。とはいえ、南京が中国の他の地域よりもひどい飢えや栄養不良を被ったことを示す証拠はない。他の都市、たとえば国民政府の新しい首都重慶などは、この戦争のときには、遙かに深刻な

食糧不足を経験した。

日本の支配下では、阿片やヘロインが盛んに販売されていたとはいえ、南京の住民は相対的に伝染病の罹患率が小さかった。占領後、日本の当局は市内で病死した死体を火葬する政策を厳格に制定した。また、彼らはコレラとチフスに対する積極的な予防接種計画を展開し、人々に年数回の接種を受けさせた。中国人の医療職員が通りと駅に待機していて、歩行者や南京を訪れる人に予防接種を施した。これは市民の間に強い憤懣を引き起こし、多くは注射針で殺されるのではないかと恐れた。西欧の宣教師の子どもたちは、駅で南京に入ろうとする中国人が消毒液の入った皿状の容器に足を踏み入れることを命令されていたことを覚えている。ほとんどの人は、その要求をひどい侮辱だと感じた（西欧人の方は、市に入るときにリゾールを噴霧された）。

数年間で、南京は壊滅から回復した。一九三八年の春に、勇気を振り絞った男たちが市に戻り始めた。あるものは損害状況を検査するために、他のものは金を使い果たしてしまったので仕事を探すために、さらに他のものは家族が戻っても安全な状態になっているかどうかを確かめるために。復興活動が始まると、労働需要が膨らんだ。それに引き寄せられて、まもなく多数の男たちが戻り始め、それから彼らの妻子が南京への移動の流れに加わるのに長い時間はかからなかった。一年半の間に、人口は二倍になった。一九三八年三月の二五万人から三〇万人の間という推定値は、一九三九年一二月には五七万六千人以上という数値に増大した。人口は一九三六年の南京市が享受していた百万人台の水準に届くことはなかったが、一九四二年には約七〇万人という頂点に達し、戦争の間その水準を保った。

日本支配下の暮らしはとても満足できるものではなかったが、多くのものが征服者の存在を認めるよ

うになるにつれ、忍従の感覚が市全体に定着していった。ときには、地下組織の抵抗もあったが、――あるときには、多数の日本人の官吏が集まっていた劇場に誰かが突入して爆弾を投げた――一般には反抗は散発的で少なかった。ほとんどの場合、日本人に対する敵愾心は、ポスターや、ビラや、落書きなどにより、非暴力的に表現された。

南京の苦しい試練は一九四五年の夏に終わった。一九四五年の八月六日に、アメリカ合衆国は日本で八番目に大きい都市広島に、効果が実証されていないウラニウム爆弾を投下し、最初の日に二四万五千人の人口のうちの一〇万人を殺した。日本の降伏が見込めなかったとき、アメリカ人は八月九日に二発目のプルトニウム爆弾を日本の長崎市に投下した。日本人が最終的に、降伏の決断を下したのは、それから一週間もたたない八月一四日のことだった。

日本人は中国の首都だった南京に、降伏の日まで残っていて、その後、大急ぎで市を去った。目撃者は、通りで泥酔した日本兵たちが嘆き悲しんでいる姿が見られたと報告している。地域の住民によって武装解除された日本人が道端で跪かされ、打ち据えられたという噂を聞いたものもいた。しかしながら、日本の駐屯兵に対する報復は限定的だったようである。多くの住民は、日本の敗北が真実ではなかったと話がひっくり返ることを恐れて、勝利を祝うどころではなく、この混沌とした期間には家の中に隠れていたのである。撤退は迅速で、日本兵に対する大規模な迫害や投獄はなかった。ある南京市民は回想する。彼女は日本の降伏後、数週間、家の中にいて、彼女が再び外に出たときには、彼らは去っていた。

八、審判の日

第二次世界大戦の終結が迫る前から、連合国は正義に対する日本軍の犯罪を裁くための戦争裁判所を組織していた。日本の敗北が十分に期待できるようになると、アメリカと中国の国民政府は裁判の予備的な手配を行った。一九四四年の三月に、連合国は戦争犯罪審査委員会を成立させ、その極東・太平洋分会は、南京陥落後の中国の戦時首都だった重慶に設立された。日本の降伏後、早い時期に、法廷の計画が進行し始めた。日本に進駐した連合国軍の最高司令部は、中国の国民政府との密接な共同作業により、中国での日本の残虐行為に関する情報を収集した。南京大虐殺時の犯罪によって、日本の権力中枢の構成員は南京での法廷だけでなく、東京の法廷でも裁かれた。

南京戦争犯罪法廷

南京大虐殺は、数年間にわたって抑圧された恐怖と憎悪を閉じ込めた、都市の魂の深いただれた傷だった。一九四六年の八月に市内でB・C級の戦争犯罪人の裁判が始まったとき、この傷が裂け、戦争の間に蓄積されてきたすべての毒素が溢れ出た。

南京では、ほんの一握りの日本の戦争犯罪人だけが裁かれたのだが、彼らはこの地域の中国市民の苦情を吐き出し、大衆レベルでのカタルシスに参加する機会を与えた。一九四七年二月まで続いた法廷の期間中に、千人を超す人々が約四六〇件の殺人、強姦、放火、そして略奪の事件について証言した。中国政府は南京の街路に目撃者が出廷して証言することを求める通知を掲示し、他方、一二の地方事務所が市全域の人々からの陳述を収集した。法廷で、彼らは次々と証言台に立ち、偽証は五年の刑罰を受けるという中国人の判事の説明する警告を聞き、真実を語ることを誓って、印刷された宣誓書に署名し、あるいは押印し、あるいは拇印を押し、あるいは十字の印を描いた。証人には中国人の生存者だけでなく、マイナー・シール・ベイツやルイス・スマイスのような安全区指導者も含まれていた。

審理では、何年ものあいだ、苦労して隠されていた証拠が明るみに出た。最も有名な証拠物件は、日本人自身が撮影した一六枚の虐殺行為の写真の小さなアルバムである。写真の現像店にネガが持ち込まれたとき、従業員は密かに一式の映像を焼き増しした。それはアルバムに納められ、風呂場の壁に隠され、後には仏像の下に秘蔵された。アルバムは手から手に渡され持ち主を変えた。人々は、日本人が脅迫して、彼らの犯罪に関する証拠を捜索したときにも、命を危険にさらしてそれを隠し続けた。一人の男はこの一六枚の写真のために、南京を離れ、逃亡者のように何年もの間、一つの市から他の市へと放浪した。(この写真がたどった写真店から最終的な安住の地である公文書館までの長く複雑な変転過程は、中国で多数の記事、論文を書く意欲を刺激し、ドキュメンタリーの大作も作成された)。

しかし、すべての証拠がそのようなセンセーショナルで遠回りな法廷までの経路を通ったわけではない。ある場合には単なる古新聞の切抜きが証拠になった。第二章で述べた有名な殺人競争に参加した二

人の少尉、野田毅と向井敏明の公判では、ジャパン・アドヴァタイザー紙の記事が提出された。もちろん、審理で二人の兵士はそれぞれが一五〇人以上の人を殺したことを否定した。一人は、その記事を外国人記者の空想だと非難し、もう一人は日本に帰ったときに妻に自慢したいと思って、競争について嘘をついたのだと主張した。一九四七年一二月一八日に法廷で評決が読まれたときには、中国人の傍聴人は大声を上げ、喝采し、喜びのあまり涙を流した。二人の少尉は銃殺隊によって処刑された。

南京戦争犯罪法廷の焦点は谷寿夫だった。一九三七年に、彼は中将として南京の日本陸軍第六師団を率いていた。この師団は市内、特に中華門付近で、多数の残虐行為を犯した。一九四六年八月に、谷は南京に連れ戻され、囚人護送車に乗せられて南京の拘留地に輸送された。彼の訴追の準備のために、白衣を着た訴訟専門家が中華門近辺の五箇所の万人坑を発掘し、数千の遺骨と頭蓋骨を掘り出した。多くは銃弾を受けて割れていて、まだ真っ黒な血痕が残っていた。

谷寿夫にとって、集中して注がれる全市の怒りに向き合うのは恐ろしいことだったに違いない。彼の着ていた黄色い日本の軍服から、階級章は、はぎとられていた。彼が被告席に着くと、八〇人を超える証人が出廷して、終わりのない唱和のような恐怖の証言を語り続けた。起訴状は、谷の師団が犯した刺殺、焼殺、溺死、絞殺、強姦、窃盗、あるいは破壊の幾百もの事例が列挙された長いものだった。証拠が提出され、そのすべては決定的なもので、劇的効果をたかめるために法廷のテーブルの上に頭蓋骨を積み上げた専門家たちの間を、検察官たちは歩き回ったりした。彼の評決が宣告された日の一九四七年二月六日、法廷の部屋は傍聴することを望む人全員が入れるほど広くなかった。二千人を超える傍聴人が法廷内に詰め込まれ、外に集まった何万人もの住民に向けて、スピーカーで進行が放送された。

評決が有罪だったことに驚く人はいなかった。一九四七年三月一〇日、法廷は彼の軍隊がハーグ陸戦規定の「陸戦と戦争捕虜の戦時の取り扱いに関する慣例」に違反し、南京の三〇万人と推定される命を奪った殺戮を助けたという結論を出した後に、死刑を宣告した。ほとんどの市民が彼の処刑を見に行った。四月二六日、見物人が街路と歩道に並ぶ中、後ろ手に縛られた谷寿夫は衛兵に導かれて南京の南部地区にある雨花台の処刑場に向かった。そこで彼は銃殺されて死んだ。多くの生存者は、彼の運命は、彼の犠牲者が蒙ったものに比べれば、限りなく人道的なものだったと考えている。

極東国際軍事裁判

東京裁判とも呼ばれる極東国際軍事裁判は、一九四六年五月三日に、日本の首都で開廷された。審理の範囲は驚異的である。極東国際軍事裁判は二〇万人以上が傍聴し、四一九人の証人が出廷した。裁判記録は四万九千ページ、一千万語になり、七七九の宣誓調書と口述調書と四、三三六の証拠物件が含まれている。それは「世紀の審理」と呼ばれ、期間は二年半に及んだ。ニュールンベルク裁判の三倍の長さである。実際に、東京裁判は歴史上最長の戦争犯罪法廷になったのである。

東京裁判では日本の二八人の軍事および政治的な指導者が起訴されただけなのに、メディアおよび法曹界の膨大な注目を集めた。公判の日には、法廷の部屋に千人を超える人々が集まった。その中には、判事、弁護士、外国特派員、記録映画のカメラマン、法廷職員、アメリカのMP、速記者、そして通訳らがいた。報道人席の左側の高い台の上に一一の連合国からの判事が座り、右側には被告席があった。傍聴人は二階の席に座り、弁護士、補助員、および書記は下の平土間に立っていた。裁判は英語と日本

語の両方で進行されたので、参加したものはすべてイヤホーンを着けていた。

「東京裁判には千のミ・ライ（ソンミ）があった」。アーノルド・ブラックマンは著書『東京裁判―もうひとつのニュルンベルク』の中で書いている。公判では、アジア全域で行われた日本の行為の恐しい詳細が、新聞記事、調査報告書、統計、そして証言記録などの形で提出された。東京裁判は永久に保存される南京大虐殺の口述の歴史記録を作成しただけではなく、その虐殺が、戦争で日本が犯した残虐行為全体の小さな一部分でしかないことを証明した。検察当局が究明したのは、たとえば、日本人が捕虜に行った医学実験であり、重病と飢えの中で捕虜たちが憔悴して倒れ死んでいった（有名なバターンの死の行進のような）行進であり、泰緬鉄道建設時の残酷な状態であり、犠牲者の鼻や口から水や灯油を腸が破裂するまで注入する日本人の「水療法」であり、戦争捕虜を文字通り関節が引きちぎれるまで、手首、腕、脚で吊り下げておく拷問、被害者を尖った器具の上に跪かせる拷問、指の生爪をはがす拷問、電気ショック、女性を裸にしてストーブの上に座らせる拷問、およそ想像できるあらゆる種類の殴打と鞭打ちであった（憲兵士官が好んだ拷問の方法には、捕虜たちを木に縛り付け、周りを囲んで死ぬまで蹴り続けるというものがあった。彼らはこれを「三重攻撃」とか「三方向からの集中」などと称していた）。彼らは生体解剖を行い、人肉を食べることさえあった。後に、日本軍の戦争捕虜の扱いはナチのそれよりも残忍であったことが判明した。ナチが捕らえたアメリカ人戦争捕虜は、二五人に一人の割合でしか死んでないのに比べて、日本軍の場合には三人に一人の割合で死んだのである。

多分東京裁判のハイライトだった南京大虐殺は、戦争全体を通じた日本人の振る舞いの暗喩という役割を果たした。UP通信の若い記者として東京裁判を取材したブラックマンは指摘する。「南京事件は、

あらゆる戦争に共通する偶発的事件という類いのものではなかった。それは意図的であった。それは政策であった。東京の指導者たちはそれを知っていたのである。実際、このことは世界の新聞の第一面を飾るニュースであった。これが…南京事件のすべてなのであった」。審理で提出された証拠は日本の弁護側を圧倒した。国際安全区委員会の何人かのメンバーが東京に飛んで彼らの日記を朗読し、独自に行った調査で発見されたことを明らかにし、南京大虐殺についての質問に答えた。東京裁判の評決は、ある立会人が語った、日本人兵士たちは「都市を破壊する野蛮人の大群のように解き放たれた」という言葉を引用して、南京における日本人の犯罪を、言葉を濁すことなく、はっきりと糾弾している。また、法廷は、日本政府が南京における虐殺行為を十分に認識していたという結論を出した。いずれにしろ、犯罪は日本大使館員の目の前で発生していたのである。国際委員会は、日本の駐外事務所と日本大使館の担当者に日参して状況を報告し、最初の六週間には毎日二通の抗議文を送り続けていたのである。東京のアメリカ大使館員のジョセフ・グルーは、廣田弘毅を含む日本の高官たちと個人的な会合を持ち、彼らに虐殺行為を知らせていた。さらに、中国へ派遣された日本の無任所公使伊藤述史も、一九三七年と一九三八年に、日本人の暴虐についての報告書を廣田に転送していた。

南京大虐殺についての非難の矛先は松井石根に向けられた。日本の中支那方面軍の当時の司令官だった松井は最も分かりやすい標的の役割を担わされたのである。南京侵略の一ヶ月前に松井は、自分の使命は「国民政府と暴支を懲罰することだ」と自慢していた。一二月一七日に、豪華な式典が挙行され、兵士たちが喝采する中を、彼は栗毛の馬に乗って入城した。しかし、歴史家は松井が南京大虐殺のスケープゴートにされた可能性をほのめかす。結核に冒された病弱な松井は、陥落時には南京にいなかったの

である。

文献が不足しているために、南京での犯罪に対する松井の責任は更なる研究と論争の対象でありつづけている。しかし資料は、結核に冒された将軍が、事件全体について罪悪感を感じていたことを示している。それは、疑いもなく、朝香宮が指揮権を握った後に、日本軍の秩序を保てなかったことについてである。南京での罪を償うために、松井は東京から海沿いに五〇マイルほど下った海岸の行楽地の熱海に自責の神社を建立した。揚子江の岸から幾袋かの土が移入され、日本の土と混ぜ合わされ、彫像され、焼かれ、彩色されて、仏教の慈悲の女神である観音像が作られた。この像の前で、松井に雇われた巫女が中国の戦争の死者のために祈祷を詠唱し、涙を流した。

しかし、自己を鞭打つ公開の見世物は一つのことで、誤りを改めて正義を求めようとする意志はまったく別のことである。今日まで、松井の東京裁判における態度は人々を困惑させるものでありつづけている。証言で、彼は南京で何が起こったのか全貌を明らかにしなかった。その説明は、問題に皇族を巻き込むことになるものだったはずである。その代わりに、彼は嘘と、ときに自責の言を無駄口のように語りつづけた。彼は南京大虐殺について弁明しようとし、ときにはそれは完全に否定し、あるいは神秘的な仏教の議論や日中の友好関係の性質を迂遠に語って、検察官をいらだたせた。しかし、彼が天皇の玉座を指差して非難の言を語ることはただの一度もなかった。むしろ、朝香宮と天皇を正しく導けなかったことについて自分を責め、検察官に彼らのために死ぬのは自分の義務だと述べた。彼は言った。「私だけでもこういう結果になるということは……大變に嬉しい。折角こうなつたのだから、このまま往生したいと思つている」。

彼は自分の思いを遂げた。法廷は、南京大虐殺が「秘密裡に命令されたか、故意に許された」と結論づけ、松井に死刑を言い渡した。彼は一人だけではなかった。日本の外務大臣だった廣田弘毅を含むあわせて七人のA級戦争犯罪人が東京裁判で有罪を宣告され、後に東京の巣鴨刑務所で絞首刑に処せられた。

不幸なことに、南京大虐殺の主犯格である犯罪者たち、あるいは皇族の権威を行使して虐殺を止めることができたかもしれない人間たちの多くは、一日たりとも法廷を訪れることはなかった。

中島今朝吾中将は、日本の降伏後まもなくして死んだ。南京で最悪の非道を犯した軍の責任者だった男は、尿毒症と肝硬変のために、一九四五年一〇月二八日に世を去った。中島はアルコール中毒になって自殺したという噂があったが、彼の長男によれば、彼の病気は化学兵器の研究・教育機関に勤めていて、しばしば毒ガスを吸ったのが原因だったという。偶然にも、戦争犯罪の取り調べにきたアメリカのMPがドアに到着したときに、医師が家族に中島は死んだと宣告したのだという。彼の伝記を書いた木村久邇典（彼は中島が南京で［上層部が決定した――訳者］「捕虜ハセヌ」方針に従ったのだと信じている）は、中島の息子の言葉を引用している。「オヤジがもし生きていたとしても、死刑はまぬがれなかったのではないでしょうか」。

柳川平助中将も一九四五年に死んだ。しかし、心臓麻痺で死ぬ前に、彼は友人の菅原裕のインタビューを何度か受けて、菅原はそれを書きとめた七冊のノートを合わせて一冊の本を出版した。この本のほとんどは柳川の軍功を賛美するものだが（菅原は「古今稀れなる大器」と書いた）、南京大虐殺についても

語っている。柳川は単純に事実全体を一笑に付し、菅原に彼の軍の暴行の報告は「デマ」だと断言した。それどころか、彼の兵は中国の家屋に住んでいるときにもスリッパを履くという厳正な軍紀を保持していたのだと自慢した。

裕仁は日本の降伏後も長く生きたが、戦争のときの彼の行動について、徹底的な道徳上の清算を問われることはなかった。アメリカ政府は、日本の降伏との交換条件で彼が訴追を免除されることを認めたので、彼は被告としてはもちろん、証人としてさえも法廷に呼ばれることはなかった。降伏の条件で日本の皇族すべてを免責していたので、裕仁の叔父である朝香宮親王（彼の指揮下で、「捕虜はすべて殺せ」という命令が出た）もまた、司法から逃れ、いかなる意味でも東京裁判への出廷は免除された。

裕仁の戦争責任を免除し、さらにひどいことに、彼の玉座を保ちつづけさせた決定は、後に日本の人々が彼らの第二次世界大戦での犯罪を自覚することを妨げる結果になった。裕仁の伝記を書いた、有名な日本研究者でもあるハーバート・ビックスは言う。「多くの人は、自分たちが侵略とジェノサイドに近い規模の殺人の共犯者でありながら、あれほどの忠誠心で奉仕した天皇が彼自身の言葉や行動についての責任をまったく問われないことを信じることが困難だった。……マッカーサーは、日本の戦後の君主制の将来の保守的な解釈、つまりかつての昭和天皇が実権をもっていなかったという解釈の土台を準備することを助けたのである」。

基本的な一次資料として使用できるものがないので、南京大虐殺における天皇裕仁の役割の詳細は激しい議論を伴う主題でありつづけている。ナチ政府の記録が連合国によって押収され、マイクロフィルム化され、後に戦争犯罪法廷の証拠として使用されたのとは異なり、日本人はマッカーサー元帥が到着

する前に、秘密の戦時記録を意図的に破壊し、隠し、改竄した。一九四五年にアメリカ占領軍が押収することができた日本軍上層部の記録についてさえも（ある教授はこれを「極めて貴重な歴史の宝物」と呼んだ）、その一〇年あまり後に、不可思議で無責任な形でアメリカ政府から日本に返還され、適切にマイクロフィルム化することもできていなかった。これらの理由により、今となっては、天皇裕仁が南京大虐殺を計画したのかどうか、承認したのかどうか、あるいは知っていたのかどうかをすら、立証することは実質的に不可能である。

おそらく、天皇裕仁の南京大虐殺との関係を説明しようと試みている英語で書かれた唯一の本は、デイヴィッド・バーガミニの『天皇の陰謀』だろう。著書の中でバーガミニは、日本人が難解な世界征服の青写真を描いたこと、さらに南京を侵略する決定を下したのは裕仁自身だったということを主張している。バーガミニは（日本の最高機密の通信を引用した完全で明白な）注目すべき逸話を提示して、南京での悲劇に行き着くまでの事件の連鎖を解き明かしている。残念なことに、バーガミニの書物は高名な歴史家たちによって厳しく批判されている。彼らは、バーガミニは単純に存在していない資料を引用しているか、驚くべきことを語るが真偽のほどを検証できない謎めいた匿名の情報提供者の言葉を引用しているのだと主張する。

さらに混乱させるのは、日本の天皇の世界征服の陰謀がかつて存在したのか否かに関する学者たちの間の論争である。長年にわたり、内閣総理大臣だった田中義一が一九二七年の東方会議のときに天皇に秘密の報告書を提出したと信じられていた。この報告書は「田中上奏文」と呼ばれ、当時の日本の野心を要約し網羅していると考えられた。報告書はこのように宣言していると伝えられる。「世界を征服する

ためには、中国を征服しなければならない。しかし、中国を征服するためには、満蒙を征服しなければならない。……我々が中国の征服に成功すれば、残りのアジア諸国および南海諸国は我々を恐れ、我々に降伏するだろう。そうすれば、世界は東アジアが我々のものであることを認識し、あえて我々の権益を侵そうとはしなくなるだろう。これは明治天皇が我々に残した計画であり、その成功は我国の自存の根本である」。

今日、一般的には、歴史家によってこの報告書は偽造文書であると信じられている。ロシアに起源があるのではないかと考えるものもいる。しかし、一九二九年の九月にこの上奏文が最初に北京で発見されたときには、これによって多くの人たちは、日本の中国に対する攻撃が、十分に画策された日本の世界征服の陰謀の一部なのだと信じるようになった。田中上奏文の英訳文は上海の新聞に掲載され、これに刺激されてハリウッドの古典映画 Blood on the Sun（太陽の上の血）が製作された。この映画では、ジェームズ・キャグニーが世界を救うために日本の基本計画書を盗み出そうとする。今日でも、田中上奏文は世界の想像力に対して、相当の説得力をもっている。中国の多くの歴史家は、田中上奏文は本物だと信じているし、中国の百科事典、辞書には、英文紙と電報サービスの記事と同じように、上奏文が事実として引用されている。

現在、日本による世界征服を計画した陰謀があったと信じている、日本のまともな歴史家はいない。一九二〇年代と一九三〇年代の日本の国家管理の混沌を検証すると、そのような陰謀はありそうもない。日本陸軍は海軍を憎んでいたし、東京の最高司令部は、手遅れになるまで、満州で関東軍が何をしているのかを知らなかった。さらに、外務省と軍部の関係は、しばしば冷え切って、意思の通じ合えないも

のだった。

しかし、多数の学者が裕仁は南京大虐殺を知っていたはずだと信じている（ハーバート・ビックスは、個人的には、裕仁が知らなかったというようなことは「想像もできない」と考えている）。第一に、それは世界の新聞の一面に掲載されたニュースだった。第二に、彼自身の弟が、血みどろ事件の詳細を彼に語っていた。話は一九四三年にさかのぼる。天皇裕仁の末弟三笠宮崇仁親王は、中国における日本の支那派遣軍南京司令部の参謀将校として一年間を過ごした。彼はそこで、青年将校が、新兵教育には生きている捕虜を目標にして銃剣術の練習をするというのを聞いた。「それで根性ができる」。将校は親王に語った。ぎょっとした三笠宮は、その訓練を「ほんとうに目を覆いたくなる場面でした。これこそ虐殺以外の何ものでもないでしょう」と描写した。「なんとかして戦争を終結させねばならないと思いましたし、やむにやまれぬ気持ちで」親王は若い参謀将校にアンケートを配って、彼らの戦争に対する意見を調べ、中国における日本人の侵略を弾劾する講義を準備し、「支那事変に対する日本人としての内省」という報告書を書いた。この論文は激しい議論を巻き起こす危険なものと思われたが、三笠宮はその皇族の血統により、これを書くことができた。後に、日本の軍部はほとんどの冊子を押収し、処分したが、一部だけが生き残り、その後国会図書館のマイクロフィルムにあることが発見された。

もし、この話が日本の戦争裁判のときに明らかになっていたら、このような犯罪の情報が届いたときに犯罪者を取り締まれなかったということで、皇族も軍司令部も同じように裁判に連座した可能性もある（三笠宮は兄の天皇に中国の状況を「断片的に」報告し、日本の中国における虐殺行為に関するニュース映画を彼と一緒に見たことをも認めている）。しかし、三笠宮の告白が公表されたのは一九九四年で、

東京裁判からほぼ半世紀も後のことだった。

おそらく、大虐殺が起こったときに裕仁がどのようなニュースを受け取ったかについて正確に知ることのできる日は永久に来ないのだろうが、記録は彼がそれについてとても満足していたことを示している。中国の首都が陥落した日の翌日に、天皇は彼の大叔父で軍参謀総長だった閑院宮親王に「非常に満足」していると語り、親王は松井石根に祝電を送った。「有史以来の壮事赫赫青史に垂るべき武勲」。裕仁は松井、朝香宮そして柳川を彼の夏の離宮に招き、皇室の菊の紋章のついた銀の壷（御紋章附銀花瓶）を下賜した。

最終的に、皇族は追求を免れただけでなく、安逸な人生を享受し、国民の崇敬を受けつづけた。たとえば朝香宮王は、引退した後に、毎週、裕仁とともにニュース映画を見、旧皇族の親睦会に席を保持し、世を去るまでゴルフ三昧の日々を送った（朝香宮はプレーヤーとして優れていただけでなく、ゴルフコースの開発にも積極的な興味を示し、日本の東部海岸の行楽地である箱根の大箱根カントリークラブのプラトー・ゴルフコースの設計をした）。裕仁自身は一九八九年に世を去るまで、平穏で威厳に満ちた日々を過ごした。

九、生き残った人たちの運命

南京大虐殺を研究する複数の学者が陰鬱な面持ちで、東京裁判の後に正義が出し惜しみされたのだと語る。南京の市民を責めさいなんだ日本人の多くが日本政府による十分な軍人恩給と救済を受けているのに対し、何千人もの被害者は沈黙の中で貧困、恥辱あるいは慢性的な肉体および精神の苦痛に耐える日々を送り、今も送りつづけている。

この逆転した正義の転回点は冷戦の出現とともに到来した。当初、アメリカ合衆国は戦争にかかわった日本の指導的な人間を排除して、日本に民主主義を導入しようとしていた。しかし、戦後、ソビエト連邦がヤルタ会談の約束を破ってポーランドとドイツの一部を奪った。東ヨーロッパに「鉄のカーテン」が引かれ、中国にも「竹のカーテン」が引かれた。一九四九年に、毛沢東の共産軍が蒋介石の軍隊を打ち負かし、彼の政府は台湾島に撤退するしかなかった。さらに、一九五〇年に朝鮮戦争が勃発し、その結果、一〇〇万人の朝鮮人、二五万人の中国人、そして三万四千人のアメリカ人が殺された。中国、ソビエト連邦、そして北朝鮮という戦後の新しい敵を前にしたとき、アメリカ合衆国は、突然、日本を戦略的に重要な国と見るようになった。アメリカ合衆国は日本の戦前の官僚機構を実質的に手つかずのま

ま残し、戦争犯罪に加担した多くの人間が罪を問われず見逃されることを承認した。このようにして、ナチの体制が解体され作り変えられ、多数のナチの戦争犯罪人が追跡されて裁かれたのに対し、日本の上層の戦争犯罪人の多くは権力に復帰し、成功者になっていった。一九五七年に、日本はA級戦争犯罪人の嫌疑を受けて拘留された男を内閣総理大臣に選出した。

同じ時期に、南京大虐殺の犠牲者のすべてでないとしても、ほとんどが、公衆の視線から見えなくなった。冷戦と荒れ狂った毛の治世の日々の間、南京は、中国の他の地区と同様に、国際社会のほとんどから隔絶された世界だった。中国の共産主義政権は、数十年の間、西側との連絡を切断しただけでなく、南京安全区の管理者として何千もの命を救ったはずの、南京に残っていた外国人のほとんどを追放した。

一九九五年の夏に、私は南京大虐殺の生存者の口述する証言をビデオテープで撮影するために西側から中国を訪れた最初の人間の一人になった。悲しいことだが、もし私が一〇年早く南京を訪れていたら、私は大虐殺の現場を完全な状態で見ることができたはずである。当時、市は歴史保存のモデルになっていて、一九三〇年代の建物の多くがまだ残っていた。しかし、一九八〇年代末から一九九〇年代にかけて、市は狂乱的な土地投機と建設ラッシュに見舞われ、古い景観は破壊され、新しい豪華なホテル、工場、高層ビル、そして集合住宅が濃いスモッグに覆われている光景に変わっていった。有名な南京の城壁もほとんどが姿を消し、数少ない城門が観光客の呼び物として残されているだけだった。

もし私が、このはちきれんばかりに密集し繁栄している都市を訪れる前に南京大虐殺について知っていなかったら、そのようなことが起こったということを想像することもできなかっただろう。市の人口は、大虐殺直後に比べると少なくとも一〇倍に増大していた。しかし、繁栄の陰に、人々の視線から隠

れるように、過去に繋がる最後の人間の絆、南京大虐殺の生存者たちがいた。市の学者たちが、南京市内各地に分散している生存者たちの何人かの家へ私を案内してくれた。

私は彼らの生活を見て衝撃を受け落胆した。ほとんどの人は、暗い、むさくるしいアパートの、ガラクタが散乱する湿気の多い黴臭い部屋に住んでいた。大虐殺のときにあまりにも酷い傷を負った人たちは、その後の何十年間、満足な生活を送ることができなかったことを私は知らされた。多くの生存者の暮らしは貧困に押し潰されているかようだった。日本から最低限の金銭的な補償があれば、その生活を大きく改善できたはずである。日本からの一〇〇ドルの補償で空調機を買えれば、彼らの多くは別の世界を見ることができたのである。

戦争のあと、生存者の一部は政府が自分たちを擁護して、日本の補償と正式な謝罪を要求してくれるのではないかという希望に執着した。しかし、中華人民共和国政府が国際的な正統性の承認を得るために、日本との同盟関係の確立を切望し、さまざまな機会で日本を許したと宣言したことで、この希望はあっという間に打ち砕かれた。一九九一年に、中華人民共和国の政府は日本の首相を中国大陸に招待した。そのようなニュースを聞くことは、二回目の強姦を受けるようなことだったし、自分たちは二重の裏切りの犠牲者なのだと考える人もいた。一度目は陥落直前に南京から逃亡した国民党の兵士に、次には、自分たちの未来を日本に売り払った中華人民共和国政府に。

国際人権問題に携わってきた弁護士のカレン・パーカーによれば、中華人民共和国は、日本向けの懐柔的な声明を何度も発表したとはいえ、戦争犯罪に対する国家補償を放棄する条約には決して署名してはいないという。さらに、たとえそのような条約が結ばれていたとしても、強行規範（ユス・コーゲン

ス）の原理により、戦争時に被った被害の補償を中国人が個人として請求する権利を否定することはできないとパーカーは主張する。

しかし、私が南京で話した生存者のほとんどは国際法の細かい規定を知らず、中華人民共和国はすでに補償の請求権を喪失していると信じていた。中国政府と日本政府の友好関係を伝えるニュースは、常に彼らの気持ちを逆撫でにするのである。南京大虐殺のときに日本人に焼き殺されそうになった一人の男性は、中華人民共和国が日本の過去の犯罪を許すという噂を聞いたときには、自分を抑制できなくなって嘆き悲しんだと言った。南京大虐殺で父親を処刑された別の女性は、日本の首相の訪問のニュースをラジオで聞いたときに、母親が気を失ったと話した。※

※　しかし、南京大虐殺の生存者のすべてが悲劇的な運命に見舞われたわけではない。ときに私は、唐生智司令官のその後の人生のような、数多くの驚くような結末を発見する。南京での大失敗にもかかわらず、中国で唐は魅力的な存在でありつづけた。はじめのうち、世間は彼に厳しかった。南京の大敗走のために、国民党内での彼は汚名にまみれ、官職を退いて故郷の湖南省に戻らなければならなかった。しかし、共産主義者が権力を握った後、彼は敵側の軍高官であったのにもかかわらず、新しい指導部は彼を受け入れた。唐は瞬く間に頭角を現し、湖南省人民政府副主席を務め、全国人民代表大会、国防委員会、中国国民党革命委員会など数多くの組織の委員になった。長い名声に富んだ政治生活の後、一九七〇年四月六日の死により崇敬を集める公的な地位を終えたとき、彼は八〇代だった。

同じくらいに暗い気持ちにさせるのは、南京安全区を組織した外国人の多くがたどった運命である。彼らは自分の力と健康を犠牲にして南京の中国人を救済したのに、これらの西欧人のほとんどは、生前

においても死後においても、彼らの行為にふさわしいものをまったく受け取っていない。この忘れられた第二次世界大戦の英雄たちに捧げられた著名な書物は存在しないし、「シンドラーのリスト」のように彼らの姿を人々の心に生き生きと呼び起こすような映画も存在しない。彼らの精神は主にベルリンからサニーヴェールまでのわずかな記録庫と屋根裏、そして彼らのことを、自分たちを救ってくれた、生きている仏として思い出すひと握りの生存者の心の中に生き続けているだけである。

多くの南京の生存者は安全区の指導者たちの行為を知っているが、その人たちの人生の最後がどのようなものであったかを知る人はほとんどいない。中国で私が会話を交わした生存者たちは、彼らを護ってくれた人たちの何人かが汚名を着せられて中国から追放されたこと、母国で尋問され社会的に葬り去られたこと、回復できない身体と心の傷を負ったこと、そして、自殺にまで追い込まれた人もいることを知ると、悲しんだ。これらの英雄の何人かは、南京大虐殺のあとからの犠牲者と考えることができる。

マイナー・シール・ベイツとルイス・スマイスの経験は、南京大虐殺の時期の彼らの英雄主義的な行為の事実が、政治的な目的のためにどんなにか歪曲されてしまうのかを示している。朝鮮戦争の間、中華人民共和国では大虐殺の歴史を歪め、新聞はアメリカ人が日本人の虐殺を手助けした悪人であるかのように描いた。ルイス・スマイスは、安全区の外国人が日本人に都市を譲り渡し、何千人もの女性を強姦させたと言って、彼らを非難する地方の新聞の記事を見た。同じような論調で、国営の「新華月報」の記事は、一九三七年に南京に残ったアメリカ人は「アメリカ政府の帝国主義政策に応じただけでなく、彼らの企業、教会、学校、および住居を中国人の血と骨によって守っていたのだ」と告発していた。記事の筆者は、安全区委員会は日本の侵略者と「忠実な共謀関係」で活動した帝国主義者の組織だったと

主張し、中国人の生存者の言葉を引用していた。「アメリカの悪魔が名前を呼び、日本の悪魔が処刑した」。大虐殺の絵が印刷され、「南京大虐殺を忘れるな、アメリカによる日本の再軍国主義化を阻止せよ！」というスローガンが書かれていた。

彼の中国語の教師は彼の安全を保証したが、このプロパガンダにスマイスは衝撃と恐怖を感じた。「スマイス博士、市内にはあなたが人々のために何をしたかを知っている一〇万人の人間がいるのです。何も悩むことはありません」。中国語の教師が言った。しかし、彼が南京で過ごす残りの日々は多くなかった。一九五一年に、彼は南京大学の職を辞し、翌年、ケンタッキー州のレキシントン神学校の教職についた。ベイツも南京を去ったが、一時、共産主義者により軟禁状態にされたのちのことである。

スマイスとベイツが受けた苦難は同僚の何人かが受けたものほど大きくはなかった。委員会のメンバーのあるものは、大虐殺によって命を削られた。ジョン・マギー牧師の息子のデイヴィッド・マギーは、日本人との折衝のストレスが父の早過ぎる死の原因だったと確信している。他の安全区指導者は、何年もの間、心理的な苦悩を耐え忍ばなければならなかった。たとえば、ＹＭＣＡ書記ジョージ・フィッチの娘エディス・フィッチ・スワップは、彼女の父が南京での日本人の残虐行為のために強い心的外傷を負ったために、その問題についての講演をするときに、しばしば完全な記憶喪失に陥ったと話した。このようなことは、少なくとも二回、フィッチがアメリカ合衆国の大きな組織の前で日中戦争について講演しているときに起きた。

南京大学病院の外科医ロバート・ウィルソンは南京での活動のために自分の健康を代償に支払った。彼の未亡人は、安全区委員会の他の医師たちが注意深く自己管理して、毎週一度は、睡眠をとるために

上海に行っていたのに、ウィルソンは無分別に休息を取らず、働きつづけたことを思い出す。昼間の外科手術は、彼の精力のほとんどを使い果たし、夜には日本兵が彼の睡眠を中断させた。彼は夜に何度も家から呼び出され、まさに行われている強姦をやめさせた。彼はアドレナリンだけに支えられて手術をしていたようである。最後には、彼の身体がもたなかった。一九四〇年、彼は激しい発作に襲われ、精神的にも衰弱したために、アメリカ合衆国に戻らざるを得なくなった。彼はカルフォルニア州のサンタバーバラで一年間過ごした。その後、中国には二度と戻らなかった。また、彼は一生、過労から回復することができなかった。アメリカ合衆国で、ウィルソンは発作と悪夢に悩まされただけでなく、朝、目の焦点を合わせることができなくなることがあった。

ミニー・ヴォートリンは自分の命を代償として支払った。大虐殺は、他の安全区の指導者や難民たちが考えていたよりも遙かに深刻な心理的代償を彼女に負わせていた。神話になろうかという伝説の下に、傷つきやすい、疲れきった女性がいて、毎日、直面させられていた日本人の暴力のために、感情的にも、心理的にも回復することができなくなっていたのだということに気づく人はいなかった。一九四〇年八月一四日の彼女の最後の日記を読むと、彼女の心の状態がはっきりと見えてくる。「私の力はもう終わってしまっているようだ。そこにあるすべての手が、障壁のようなものになっているみたいで、もう、前を向いて、仕事をしようと計画することもできない。私はすぐに休暇に入れればいいなあと思うが、誰がＥＸＰコースを考えるのだろう？」

二週間後に彼女は神経衰弱に襲われた。彼女の日記の最後のページの最下行には、明らかに彼女以外の誰かの手で書かれた一文がある。「一九四〇年五月、ヴォートリン女史の健康が破壊されたので、彼女

はアメリカ合衆国に帰らなければならなくなった」。彼女の姪は、ヴォートリンの同僚が彼女を治療するためにアメリカに送り返したが、太平洋を横断する航海の途中で、彼女が何度も自殺しようとしたことを思い出す。ヴォートリンに付き添っていた友人は、彼女が船から身を投げようとするのを、必死に制止した。アメリカ合衆国に戻ると、彼女はアイオワの精神病院に入ったが、そこで電気ショック療法を受けた。退院後、ヴォートリンはインディアナポリスの連合キリスト教宣教伝道社へ働きに行った。ミシガンのシェパードに住んでいた彼女の家族はヴォートリンに会いに行こうとしたが、彼女はすぐに自分から会いに行くという手紙を書いて思いとどまらせた。それから二週間後に彼女は死んだ。南京を去ってから一年後の一九四一年五月一四日に、ヴォートリンはドアと窓にテープで目張りをして、ガスの栓を開き、自殺した。

さて、ジョン・ラーベの運命である。長い間、彼の人生は歴史家の謎だった。召喚されてドイツに戻る前に、ラーベは南京の中国人に、彼の母国で日本の残虐行為を公表し、ヘルマン・ゲーリングへの謁見を求め、できればアドルフ・ヒトラーにもそうすると約束した。南京の人々は、ラーベの訴えかけがナチの指導者を動かし、日本政府に圧力をかけて大殺戮をやめさせることができるようにと祈った。ラーベが出発する前に、中国人の医師が、中国人は共産主義者ではなく平和を愛する国民で、ほかの国々と協調して生きていきたいと望んでいるのだとドイツ人に話してくれるようラーベに頼んだ。一九三八年二月の感動的な送別会の後に、ラーベはマギーの南京大虐殺の映画フィルムを持ってドイツに向かった。その瞬間から、彼はすべての記録から姿を消し、彼のその後は、何十年もの間、歴史家を悩ませるものだった。

私がことの詳細を突き止めようと決心したのは、二つの理由からである。第一に、心優しきナチ党員がアメリカ人の宣教師と協力し合って日本兵から中国人難民を救ったという逆説めいた話が、私にはあまりにも興味深く、見逃せなかったからである。そして第二に、私はラーベがドイツに帰国した後に、彼の身に何か恐ろしいことが起こったのに違いないと確信したからである。いずれにしろラーベは、彼の同僚たちとともに南京の恐怖を証言する機会であった極東国際軍事法廷にも現れなかった。また、彼の友人の一人とのインタビューでは、ラーベがヒトラーの政府との間で何らかの衝突を起こしたらしいということが推測された。しかし、その友人も特別に詳しいことを語ってくれなかったし、私が文献を見つけたときには、もう彼は生きていなかったので本人からすべての話を聞くこともできなかった。

あらゆる方向の疑問が私の頭の中を駆け巡った。ラーベは本当に映画フィルムと上申書をヒトラーに見せたのだろうか？　あるいは、とんでもないことだが、彼はナチの機構に深入りして、ユダヤ人の絶滅に加担したのだろうか？（彼の南京における英雄的な行為を考えると、私はこれをほとんど信じることができなかったが、可能性がないわけではなかった）。彼は戦争のあとで投獄されたのかもしれない。あるいは、誰も彼の消息を知らないのは、彼が法からの逃亡者になって余生を中南米のどこかの国で過ごしたからなのかもしれない。また、私は彼が南京大虐殺の個人的な日記をつけていたのかどうかも気になった。しかし、たとえ彼がそのような文書を持っていたとしても、それは戦争の間に、空襲で焼けてしまって失われたに違いない。そうでないとすれば、そのような日記はすでにどこかの図書館に保管され、世界中の人が利用できるようになっているはずである。それでも、私はドイツに手紙を書いて、何でも見つかるものを求めることで悪くなることはないと考えた。

私はラーベに関する重要な手がかりを知っていた。世紀の変わる時期に、彼はハンブルクで徒弟修業をしていた。多分、彼はそこで生まれたのだろうし、その市内には彼の家族がまだいるはずである。私はなんとかしてハンブルクの鍵を握る情報源と接触しなければならなかった。私は古い友人に助けを求めた。研究者たちに「国家的な宝」と呼ばれているジョン・テイラーである。彼は半世紀以上もワシントンDCの国立公文書館に勤め、世界中の重要な歴史家に関することをすべて知っていた。もしも、第二次世界大戦の時期の中国におけるドイツ人社会の歴史について何らかの研究をした専門家がこの惑星の上にいるのならば、おそらくテイラーはそれが誰だか知っているはずである。テイラーはカルフォルニア州ファーンデイルの歴史家チャールズ・バーディックに連絡したらどうかと示唆した。次に、バーディックはハンブルクの市の歴史の研究者に手紙を書いたらどうかと示唆した。彼はまた、彼の友人のマーサ・ビージマンの住所を教えてくれた。彼は彼女について、市についての詳しい連絡網を持っているだけでなく、喜んで協力してくれる「素晴らしい淑女」だと保証してくれた。数日の間に、私はラーベの謎についてビージマンに手紙を書き、ハンブルク最大の新聞社の編集者にも手紙を書き、その手紙で私の調査が進展することを期待した。とはいえ、どちらからもそれほど早く返事がくるとも思えなかったので、私は別のことに注意をむけようとした。

驚いたことに、ビージマンからの返事はすぐに送られてきた。偶然的な出来事の連鎖を経て、彼女はすでにラーベの家族を見つけ出していた。「私はあなたに協力できて幸福です。しかし、それほど難しいことではありませんでした」。彼女の一九九六年四月二六日付け手紙は言う。「最初、私はバイエルンのパスター・ミューラーに手紙を書きました。彼は以前中国にいたドイツ人の消息を集めています。何日

かして、彼はすぐに電話をくれて、ジョン・ラーベの息子のオットー・ラーベ博士と、彼の妹のマルガレータの名前を教えてくれました」。彼女は手紙に、ベルリンに住んでいるラーベの孫娘ウルスラ・ラインハルトからの伝言を同封してくれた。

その瞬間から、物事が急速に動き出した。ウルスラ・ラインハルトは中国で生まれ、少女のときに、陥落の数ヶ月前の南京に行ったことがあるということを私は知った。彼女はラーベお気に入りの孫娘だった。有難いことに、ラインハルトの協力は私の調査にとって限りなく有益で、彼女は沢山の長い手紙を私宛に送ってくれた。ラインハルトが送ってくれた手書きの文章、写真、新聞記事は、ラーベの人生の失われた記録のかなりの割合を充填してくれた。

ラーベは、日本人による南京の恐怖をドイツ政府の当局に知らせるという中国人との約束を守っていた。四月一五日に、彼は妻とともにドイツに戻り、その業績に対して多数の栄誉を受けた。ベルリンでは、ドイツの国務長官が中国におけるラーベの努力を公式に称賛した。ラーベは赤十字級の勲功十字章を贈られた。シュトゥットガルトでは、さらに銀板ドイツ功労賞を受け、中国政府からは、宝光嘉禾章を贈られた。その五月に、ラーベはジーメンス本社、外務省、極東協会、そして国防省の各会場で、一杯に集まった聴衆の前で講演し、ジョン・マギーの映画フィルムを上映して、南京大虐殺についての情報を公表した。しかし、ラーベはアドルフ・ヒトラーに拝謁することはできなかった。そこで、六月八日に、彼は総統宛てに手紙を送り、映画フィルムとタイプした南京大虐殺についての上申書を同封した。

だが、ラーベがヒトラーから同情的な返事を得られると期待していたとすれば、彼は重大な誤りを犯

していたことになる。数日後、ゲシュタポの二人の捜査官が彼を逮捕するためにやってきた。ウルスラ・ラインハルトはそのときにそこにいた。彼女が七歳のときで、ドアの近くで新しいローラースケートに乗ろうとしていたとき、白い襟の黒い制服を着た役人風の男たちが、ラーベを外で待っている自動車の方に連れて行くのを見た。「祖父は当惑しているようでした。二人の男はとても厳しく険しい表情だったので、祖父に別れの挨拶をすることもできませんでした」。

ラーベはゲシュタポの本部で数時間尋問された。ゲシュタポが彼を釈放したのは、雇用主のカール・フリードリッヒ・フォン・ジーメンが彼の人柄を保証し、ラーベが日本のことを表立って話すことを控えさせると約束したからだった。ラーベはこの問題について、二度と、講演も、議論も、執筆もしないようにと、そして、特に、ジョン・マギーの映画フィルムを誰にも見せないようにと警告された。ラーベの釈放後、ジーメンス社は、彼を保護するためだったのだろうか、すぐに外国に派遣した。その後の数ヶ月間、ラーベはアフガニスタンで働き、ドイツ国籍の人間がトルコを通って国を離れることを補助していた。一〇月になってからドイツ政府は彼の報告書を送り返してきたが、ジョン・マギーの映画フィルムは戻らなかった（ラーベはヒトラーが上申書を読み、映画を見たのかどうか確かめることができなかった。しかし、現在、彼の家族は見ただろうと確信している）。ドイツ政府はラーベに、彼の上申書は教育省に送られ、そこで政府の高官たちがそれを読んだが、そのことによってドイツの日本に対する外交政策が変わることを期待してはいけないと通告した。

その後の数年間はラーベにとって悪夢のような日々だったことは間違いないだろう。彼のアパートは空爆され、ロシア軍がベルリンに侵攻したために、彼の家族は窮迫した。ウルスラ・ラインハルトは、

彼らがベルリンのソビエト占領地区ではなくイギリス占領地区にいたから、生き延びられたのだと確信している。ラーベはジーメンス社で経済記事を英訳して、不定期に仕事をしていた。しかし、低賃金のために、家族の生活は苦しかった。

連続して告発を受けた戦争直後の時期は、ラーベにとって長い腹立たしい日々だったに違いない。まず、ラーベはソビエト当局に逮捕され、仮借ないアーク灯のまぶしい光の前で三昼夜にわたって尋問された。次に彼はイギリス当局に逮捕され、イギリス当局は彼をまる一日締め上げたが、のちに彼に労働許可を与えた（しかし、ジーメンス社が依然として恒久的な職を用意しなかったので、この労働許可はラーベにとってあまり価値のないものだった）。最後の屈辱を受けたのは、知人によって弾劾され、長い「非ナチ化」処置が始まったときだった。彼は自分の法的な弁明のために費用を払わなければならなかった。彼は、この過程で労働許可を失い、貯えも精力も使い果たしてしまった。ラーベは、家族とともに狭い一部屋の中で、寒さと飢えに苦しんだ。そして、豆や、パンや、石鹸を買うために、大事にしていた中国の工芸品の収集品をアメリカ兵に売らなければならなかった。栄養不良のために皮膚病に冒され、悲嘆とストレスのために彼の健康はほとんど破壊されてしまった。南京では彼は伝説だったが、ドイツでの彼は生ける屍だった。

一九四五年から一九四六年にかけてのラーベの日記の抜粋を見ると、彼の精神状態が明らかになる。

ジーメンスに仕事はない。――私は失業者だ。……軍政府の命令により、私はシュパンダウ（ベルリンの北西地区）のシュタット＝コントールバンクに、私のスタンダード・ライフ保険証券

を登録しなければならないということだ。私が長年働いて貯えた一〇二七・一九ポンドの（五千ポンドの残り）保険証券はビュンデのグレーテル（マルガレーテ、彼の娘）の所にある。私は銀行の領収書を渡した。もう、この金はなくなった！

前の日曜日はマミー（ドーラ・ラーベ、ジョン・ラーベの妻）と一緒に、クサンテナー通り（砲撃されたラーベのアパート）にいた。私たちの地下室のドアが壊され、私のタイプライターと私たちのラジオとそれ以外の多くのものが盗まれた――没有法子（メイヨウファーツ）！

今、マミーの体重は服を着たままでも四四キロしかない。私たちは、非常に痩せてしまった。夏が終わる―冬はどうなるのだろう？　どこで食べ物と燃料と仕事を見つければいいのだろう。私は今、ティンパレイの *What War Means*（南京大虐殺について記録した本）を翻訳している。これは今すぐには金にならないが、ひょっとすると、もう少しましな食糧配給券を得られるだろう。……すべてのドイツ人が私たちと同じような境遇だ。

私たちは、ずっと空腹だった。―何も話すことはないから、何も書かない。貧しい食事に加えて、どんぐりの粉のスープを食べた。マミーが秋にこっそりとどんぐりを集めておいたのだ。その貯えもなくなってきたので、くる日もくる日もイラクサを食べている。ほうれん草のような味がする。

昨日、非ナチ化の嘆願が拒否された。私は南京安全区国際委員会の責任者として二五万の中国人の命を救ったのに、私が短期間だけ南京の国家社会主義ドイツ労働者党の地区指導者だったこと、私のような知的水準のものはあの党の党員になろうとしてはいけなかったということで、私の要求は拒否された。控訴しよう。……もし、彼らが私にSSW（ジーメンス・シュッケルト・ヴェルク、ラーベの会社の名前）で働く機会をまったく与えないのならば、私はどうやって生きていけばいいのか分からない。私は戦いつづけなければならない。—それにしても、私はひどく疲れてしまった。今、私は、毎日、警察官に尋問されている。

私が中国でナチの虐殺を聞いていたら、私は国家社会主義ドイツ労働者党に入らなかった。そして、もしドイツ人としての私の意見が南京の外国人たちと衝突していたら、南京のイギリス人、アメリカ人、デンマーク人などの人たちは私を南京安全区国際委員会の代表に選ばなかっただろう。南京では、私は数十万人の人々の生きている仏だった。そしてここでは、私は「最下級民」でのけ者だ。おかげでホームシックも治ってしまった。

六月三日に、シャーロッテンブルクのイギリス地区の非ナチ化委員会によって、私はとうとう非ナチ化された。判決はこうだ。「あなたは国家社会主義ドイツ労働者党の地区指導者の代理だったうえ、ドイツに戻ったのちも、国家社会主義ドイツ労働者党の党籍を離れなかった（ウルスラ・

ラインハルトは、そうすることは自殺することだったと注記した）けれども、あなたが中国で行った人道的な仕事を考慮して、委員会はあなたの異議を支持することに決めました」云々。

これにより、神経の拷問は終わった。私はＳＳＷの多くの友人と重役に祝福され、会社から緊張を解きほぐすための休暇を認めてもらった。

今日、マミーは私たちの中国の木像をもってクレブ博士のところに行った。彼は私たちに食料を提供してくれ、そしてこの像をほしがっていた。中国の孔にプレゼントされた中国絨毯、これは三〇〇ポンド（約一五〇キログラム――訳者）のジャガイモのお礼として、トウプファー夫人に贈った。

一九四八年ごろ、ラーベの苦境のニュースは中国に伝わった。南京市政府が市民たちにラーベが助けを必要としていることを知らせたときの反応は恐ろしいほどで、ほとんどフランク・キャプラの古典的な映画「素晴らしき哉人生」の結末を思わせるものだった。何日かのうちに、大虐殺の生存者たちはラーベを援助するために中国の貨幣で一億元を工面した。これは、ざっと換算して当時のアメリカドルで二千ドルに相当する金額だった。一九四八年当時の貨幣価値としては、決して小さな金額ではない。その年の三月に、スイスに旅行中だった南京市長が、大量の粉ミルク、ソーセージ、お茶、コーヒー、牛肉、バターそしてジャムを購入し、四個口の巨大な包装箱にまとめて、ラーベに配送した。一九四八年の六

月から、首都が共産主義者の手に落ちるまで、南京市民は毎月大量の食料をラーベに郵送して、国際安全区委員会の指導者の役割への心から感謝の気持ちを表した。国民政府は、中国の住宅をラーベに無料で提供し、中国に戻った場合には終身年金を支払うと申し出た。

荷物はラーベと彼の家族にとって、天の助けだった。一九四八年の六月にラーベから大層なお礼の手紙を受け取った南京市民は、ラーベがどんなにひどい状態の中で、援助を必要としていて、それを受け取ったのかを知った。その手紙は現在も中国の公文書館に残っている。荷物が届く前には、家族は野生の雑草を集めて子どものスープにしていた。大人はほとんどパンだけを食べて何とか生活していた。ラーベは南京への手紙の中で、ベルリンの市場からはパンさえもが姿を消しているので、受け取った荷物は彼らにとってますます貴重になったと書いた。彼の家族全員が、南京市民の援助に感謝した。そして、彼自身でこの贈り物によって人生の信念を取り戻すことができたと書いた。

ラーベは、一九五〇年に脳卒中で死んだ。彼は死ぬ前に、中国における彼の活動を記述した遺産を残した。それは、南京大虐殺に関する二千ページを超える文書で、正確にタイプされ、番号を振られ、綴じられ、図解も添えられていた。これらの文書には、彼と他の外国人の証言の報告書、新聞記事、ラジオ放送、電報、そして虐殺の写真が含まれていた。疑いもなく、ラーベはこの記録の歴史的価値を理解していた。多分、彼は将来これが出版されることを予想していたのだろう。彼の死から一〇年後に、ウルスラ・ラインハルトの母親が彼の書類の中から日記を見つけ、彼女に譲ろうとしたが、その申し出は時期が悪かった。ラインハルトはそのとき妊娠していて、また学校の入学試験の準備に没頭していた。それ以上に重要だったのは、彼女は身の毛のよだつような内容の日記を読むのが怖かった。彼女が丁寧

に申し出を断ると、ジョン・ラーベの息子オットー・ラーベ博士が代わりに書類を相続することになった。彼が所蔵した書類は、世界の人々はおろか、ドイツの歴史家にも知られずに、半世紀が過ぎた。

書類が秘密の存在だったことの理由として、いくつかのものが考えられる。ラインハルトによれば、ジョン・ラーベ本人が息子に日記の存在を公開しないように警告していた。彼がゲシュタポで受けた扱いには、彼をこのように慎重にさせる原因の何かがあると言えるかもしれない。しかし、家族が日記の存在を明らかにすることを嫌うもっと根本的な原因があった。ラーベの前ナチ党員という経歴を家族の何人かが気にしていたことは理解できるし、戦争直後の時期にはナチ党員の文献を出版したり、あるいは彼の成し遂げたことを誇ることは、価値があるものだとしても、単純に政治的に正しくないことだった。

南京安全区委員会のほかのナチ党員も、同じように彼らの記録については沈黙を守り続けていた。ラーベの文献の発見の少し後に、私は南京大虐殺に関するほかのナチ党員の日記の存在を知った。それはDays of Fate in Nanking（南京の運命の日々）と題されたクリスチャン・クレーガーの日記だった。彼が九〇代で亡くなった後に、息子のピーター・クレーガーが、父親の机の中の日記を発見した。彼は私への手紙で、私の手紙が届いた時期が幸運だったと書いている。私の手紙が一ヶ月早く届いていたら、彼は私にこの問題に関して父親はいくつかの新聞記事を保存していただけだと答えただろう。現在に至るまで、彼は父親が南京大虐殺や日記について、なぜ彼に一言も話さなかったのか不思議に思っている。私は、その理由が、ヒトラーに大虐殺の報告書を送った後にラーベが転落し、取調べを受けたことと関係しているのではないかと思う。事実、日記の最下行には、クレーガー自身の筆跡で、次のような手書

きの警告文がある。「ヒトラー政権の現在の見解に反する。結果として、私はこれに対して非常に慎重でなければならない」。

最終的に、ラーベの英雄的な努力を世界に訴えたのは、ウルスラ・ラインハルトだった。私の手紙が彼女に届いたときに、彼女は日記を詳しく調べてみるべきだと決断した。彼女は伯父から文書を借り、自分自身を奮い立たせてそれを読んだ。その内容は彼女が予測していた最高の荒々しさを遙かに超えて暴力的だった。南京での、公道で日本兵によって強姦された女性たちの描写や、生きたまま焼かれた犠牲者の描写は、彼女をひどく動揺させた。数ヶ月経っても、彼女には祖父の報告書を読んだ恐怖が強く残っていたので、「人民日報」の記者に南京大虐殺についての自分の正直な意見を述べるのに躊躇はなかった。その意見は、確実に激しい論争を煽り立てるものだった。南京の犠牲者に対する日本人の拷問は残忍さにおいてナチを超えている。日本人はアドルフ・ヒトラーよりも悪かった。

ラインハルトは日記を世界に公開することについて悩んでいた。彼女は、その日記が中国と日本の関係を破局に陥らせる可能性をはらむ政治的爆弾だと考えていた。しかし、私にせきたてられ、南京大虐殺の犠牲者を記念する同盟の前会長で国連で勤務したことのある邵子平（シャオツピン）にもせきたてられ、彼女は日記を公表することを決断した。彼女は一五時間かけて、それを複写した。日本の右翼が彼女の家に押し入って日記を処分してしまうのではないか、あるいは家族に莫大な金額を提示して原本を買収してしまうのではないかというようなことを危惧した邵（シャオ）は、大急ぎでラインハルトと彼女の夫にニューヨーク市に来てもらい、こうして日記はエール大学神学大学院に寄贈された。そのときの記者会見は、一九九六年一二月一二日、南京陥落の五九度目の記念日に、まずニューヨーク・タイムズの卓越した記事によって紹

介され、続いてＡＢＣ・ＴＶのピーター・ジェニングス、ＣＮＮ、およびその他のメディアで取り上げられた。

歴史家たちは異口同音にこの日記の価値の高さを認める見解を述べた。多くが、この日記は南京大虐殺が現実に起こったのだということのさらに決定的な証拠であると考え、それがナチの視点から語られていることが魅力的だった。ラーベの説明はアメリカ人による虐殺の報告が真正なものであることを裏付けた。そもそもナチ党員には虐殺の話を捏造する動機がなかったのだが、それだけでなく、ラーベの日記には英語からドイツ語に翻訳されたアメリカ人の日記が含まれていたが、それは原文と一語一語対応していたのである。中華人民共和国では、「人民日報」に書かれた研究者の記事で、この文献が現存する大虐殺の中国語の一次資料と照合され、相互に補強されたと伝えられた。アメリカ合衆国では、ハーヴァード大学の中国史教授ウィリアム・カービーがニューヨーク・タイムズに語った。「これは、膨大な数の詳細な記述や事件が注意深く集められた、信じられないほど魅力的だが憂鬱な物語だ。これは、この事件の入口を、人々が日々の会話の中で確かめることができるような新しい方法で、再び開くことになるだろう。そして、すでによく知られているものに、百から二百の話を付け加えるだろう」。

日本の歴史家でさえも、ラーベの発見が重要なものであると表明している。笠原十九司宇都宮大学教授（中国近現代史）は、朝日新聞に語った。「当時、現地にいたドイツ人による初めての記録としての史料価値だけでなく、ヒトラーに訴えていたことの意味も重要だ。ラーベのような立場にある人間が、日本の同盟国の最高指導者にあえて訴えたこと自体、大虐殺の存在を裏付けるものだ」。秦郁彦千葉大学教授（日本現代史）が付け加えた。「日本の友好国だったドイツ人が客観的に当時の状況を描写してい

る。その意味で、当時から日本への反感が強かったとされる米国人牧師の証言よりも史料的な価値は高いと思う。当時のドイツは、中国と日本のどちらの側につくか迷っていた。だが、三八年にリッベントロップが外相に就任後、急速に対日提携が進んだ。そんな時期に、ヒトラーに直訴を試みたラーベの勇気には驚く」。